
なんか、神隠しにあったみたいで……

junq

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんか、神隠しにあっ たみたいで……

【Nコード】

N9954P

【作者名】

junq

【あらすじ】

ちよつと軽はずみな行動を取ったが為に、神隠しにaimました。これから送るはずだった平々凡々とした日常ではなく、波乱万丈の冒険を求めて、俺は異世界に旅立つ。世界樹の迷宮とやらの、ブシドーとカースメーカーの力を持って。

……どいなんですか、こい。 (前書き)

世界樹の迷宮の小説が増えることを祈って……

半分嘘です。

どちらかというと、暇つぶしの方が強い理由です。

……どうなんですか、リリ。

「……うえっぶ。気持ち悪……」

電車から降りた俺は、顔を青くしながらも呟いた。途端に、俺の周りから人がザツ！と引いた。俺が吐くとも……やばい。めっちゃ吐きそう。

そのまま、俺はフラフラと家に向かって歩き出した。……手で口元を押さえながら。

なんでこんなに気持ち悪くなっているのか？
その答えは簡単だ。
俺が飲み過ぎただけである。

自分の限界を、弁えて飲もうぜ……うえっぶ。

俺はフラフラと夜道を歩きながら、考える。

いつもはこの先を左に行ってるけど……右に行っても帰れるはずだよな？

通ったことは無かったが、家の近くで左右の道が交わっているのは知っている。

おそらく、そこまで続いているだろう。

相変わらずフラフラしながら、俺は若干暗い右の道を進んだ。

鼻歌を気分良く歌いながら歩く俺の目に、階段が入った。
現在進む道とは直角の角度で設けられた階段は、暗いせいもあって、見えないくらい上まで続いていた。

その途中に鳥居があるということは、神社なのだろうか。

「……………うし。ちよっくら行ってみるか」

勿論、その選択肢は間違っていた。

うん。酔っ払いの思いつきなんて禄なもんじゃねえよ。

「うーむ。寂れてやがるなあ」

本堂は明らかに朽ちかけ。

賽銭箱に付いている南京錠さえ、錆に覆われて元の色は見えない。

しかも、扉が微妙に開いているせいで、本尊が見える。

流石に暗くて見えにくいのが、どうやら阿修羅像らしい。腕がいつぱいだ。

「よし、ちょっとくらい拝ませてもらいますかね」

ギシギシと階段が音を立てるが、無視。

土足のまま、俺はどかどかと本堂の中に入りこみ……

「んあ？」

物音がした気がして、上を見てみれば。

ギシリ、という音と共に、朽ちた梁が落ちてきた。

「……………どこなんですか、ここ」

酔いなんて、吹っ飛んだ。

というか、あの大きさの梁が当たったら死ぬんじゃないか？

一面に、満天の星空が広がる空間。

その中に、俺は立っていた。

……床が見えないんだけど、どーなってんの？

プラネタリウム？

いや、それなら頭上に不自然な光などがあるはずだ。

それに、俺の体で光が遮られた様子もない。

宇宙ステーション？

それなら、足元はガラスということになるのか？

だが、俺が自分で自分の体が視認できるほどに、この場所は明るい。それだけの光はどこから？

太陽のような恒星が、近くにあるようには見えない。

考え込んでいる俺に、後ろから声がかかる。

「アンタ、どこから入ったんだ？」

振り向けば、そこには黒髪黒目なのに、ありえないくらい顔が整った男が居た。

この顔の彫りの深さとか、日本人じゃねえだろ……

そんなことをごちゃごちゃ考えている内に、目の前の男がどんどん不機嫌になっていくのに気付く。

ミシミシと、空間自体が軋むような不可解で、本能が嫌悪するような音が周りからし始めた。

まさか、これをやっているのは、この男なのか！？

慌てて、俺は何を言おうかと考えて、サラリーマンの悲しい習性が俺の体を動かした。

「すいまつせんでしたぁー！」

サラリーマンの悲しい習性……上司、もとい上の存在には逆らえない。

俺だけ？ 何を言っているのか分からないなあ（棒読み）

腰を90度に曲げ、謝った途端に、音は止み、男から注がれる視線は比較的、穏やかなものとなった。

「んー、冷静に見てみると、何も感じない……日本人だよな？」

「ええ。はい。そうです」

俺は、そのまま綺麗なお辞儀を維持して、受け答えをしていく。段々、視線が哀れみの籠った目になってきたが、細かいことだ。

「ここに来る前は何をしてた？」

「神社の本尊を拝もうと、本堂に入るところでした」

「……本堂壊れたりした？」

「え？ なんでそう思うんです？」

そう答える俺の額には、冷や汗がタラリ。
なんで知ってるんですか。

「いや、本堂って一つの結界みたいになってる場所があるんだよね。その結界が崩れると……」

そう言いながら、男は右手の親指、人差し指、中指を広げた。すると、指の間に青色の壁が形成され、上に長いピラミッドのようになる。

それを左手では赤色で、同じようにしたかと思うと、男は握り締めるように青色のピラミッドを握り潰した。そこからは一目瞭然。赤色のピラミッドの中に、青色の破片が現れた。

つまり、あのピラミッドは結界に例えられたもの。ということとは……

「稀に、他の結界に中の物が紛れ込む。日本では神隠しと呼ばれるりするね」

なんですとー！

「じゃ、じゃあ、元の場所には……」

「どこの世界かなんて、区別付かないよ。十の百乗なんて優に超える数の世界があるんだよ？」

えーと、十の六十四乗が一無量大数だっけ？

……うん。無理だ。

「まあ、適当な世界に行きたい、って言うならあまり危険じゃない世界に行けなくてもないが……」

どうするんだ？

まるで、悪魔の囁きのように、その言葉は響いた。

……いや、しかし。考えたことはあつたはずだ。

もっと波乱万丈の人生の方が楽しそうではないか、と。

「危険な世界に行きたいって言うなら、まあ何かしらの能力くらいはくれてやるしな」

それを聞いて、腹は決まった。

……最も、それは言語以外にも色々な要素を使つての意識誘導だった訳だが。

「危険な世界で、お願いする」

「へえ。そつちを選ぶんだ」

男が後ろに手をかざすと、そこに青い渦のようなものが滲み出てきた。

最近見たもので一番近いのは、鳴門の渦潮か。

「門だ。これをくぐると同時に、アンタには能力が備わり、普通の人生は歩めなくなる」

「望む所って奴さ」

俺は走って、門へと飛び込んだ。

後ろから、男の声が追いかけてくる。

「波乱万丈奇奇怪怪。奇想天外吃驚仰天の旅の始まりだ」

勘違い祭り

意識が浮上すると、そこは机と椅子以外の物が余りない部屋だった。白い壁といい、このシンプルな調度品といい……まさか。

そこまで考えが行き着くと同時に、右の方向からガチャリという音がした。

顔を向けると、30代中盤くらいのカッコいいおじさんがドアから入ってきた所だった。

「すみません。遅くなりました。では面接を始めたいと思います」

スイマセン。ちょっと予想ついてたけどマジですかー!?

その後、この学園で働きたいと思った理由、などを聞かれて困ったが、口がリアルに勝手に動いた。
というより、学園で。教師免許なんぞ持ってないんだが。

「ありがとうございます。面接は終了です。結果は追って連絡します」

おじさんの発言と同時に、ポーンという高い音と共に青い半透明の板が出現した。

ビックリしたが、おじさんの反応を見る限り見えていないようだ。

「まずその場合は、幽霊が見えたと思ったとか、適当言って誤魔化しておいた。」

その後、学園長室……

頭がぬらりひよんと見間違う程長い人物が、座っている。
その人物の前にあつた電話が突然、鳴り響いた。

「む、高畑くんか。……新任の先生が？ あい、分かった」

ガチャリ、と受話器を置き、部屋の主である麻帆良学園長、近衛近右衛門は密かに呟いた。

「霊視能力者か……そういう情報は無かつたはずじゃが……」

近右衛門の手元には、先ほど面接を受けた男の情報が記された紙が握られていた。

備考の欄には、素行調査の結果がびっしりと書き込まれている。
また異能の類が無いかどうか、徹底的に調べられ、その結果『白』と認定されたのだが……

「まだ『灰色』といった所じゃのう……」

ああ、彼が『幽霊』という単語を口にする前後に、『相坂さよ』という幽霊が、その場に実際に居なければ、状況はもっと簡単だっただろうに。

青い板を、人気の少ないところで色々触って確かめたところ、重要なものを見つけた。

『HELP』

説明書かよ！ と突っ込んでしまったが、無いよりはあるほうが良いと思ひ直す。

読んでいく内に分かったことを纏めると、こうなる。

- ・相手に呪いや状態異常を与えるのは得意。
- ・火力は半端ない。
- ・紙装甲。

……『ブシドー』だとか『カースメーカー』だとか、明らかにゲームの話と思える情報を取り除くと、こうなった。

更に『CUSTOM』にて、スキルポイントを振れとのこと。

3ポイントあるので、取り敢えず『呪言マスター』『力祓いの呪

言』 『逃走確率UP』に1ずつ振る。
相手の攻撃力を下げる呪言らしいので、取り敢えず生存確率を上げる為にとっておく。

『刀マスター』というのもあるのだが、刀を入手するのは難しいだろう。

当分は保留だ。

出来ることの確認は終わった。

ホテルにでも泊まろう。

件の男は、中空で手を動かすような動作を続けている。
やはり、彼は『黒』なのだろうか。

もし、そうならば。

「僕にも、守るべきものがある」

例え、人の命を奪ったとしても、守らなければならないものが。

覚悟を決め、殺気を男に放つが、動じた様子は無い。

距離があるとはいえ、全く届いていないはずはないのだが……
まさか、そこまでの実力を隠しているということだろうか。

僕が一瞬、躊躇っているうちに、男は人気がある方向に歩き出した。魔法の秘匿も考えなければならぬ。空中に浮いている状態で追いかけるのは不味い。

だが、少々視界が悪い。
降りている内に撒かれてしまっただろう。

「ここまでかな」

決して、気が許せない相手のようだ。
心してかからなければ。

「えーと、レベル上げの方法は何でもいいから苦労しろ？ ……適当だ」

ステータスに『レベル1』と書かれていた時は焦ったが、それについて『HELP』に記載があった。
この説明はいくらなんでも大雑把過ぎるが。

既に、場所はホテルの一室。
財布に入っていた十枚の内、一枚を使って止まれる宿を探した為、

そこそこだが。

まあ、その程度で安眠できない俺ではない。

俺が習得出来るスキルは、『ブシドー』のものと、『カースメーカー』のもの、二つに分かれているようだ。

あの男も、『ブシドー』のスキルを『カースメーカー』で補助したら強くな？ くらいの認識でやったのだから、防御が紙過ぎる。

とつか……苦労って……

余りにも曖昧すぎて、何をしていたのか分からん……

……勇気がいることでもすればいいか？

……しばらく考えた上で、結論はナンパだった。

なんでやねん。

自分にツツコミながら、俺は寝る体勢に入った。

明日になったら本気出す。

教え子に勘違いされるだけの簡単なお仕事です

「じゃあ、今日からよろしく頼むよ」

ありえない。

そう思いながら、俺は目の前のダンディに笑顔を返した。

3月に入って、採用通知が来た。

まあ、食う為には働かなければいけない。

これまで食ってこれたのも、住所が不明瞭なのに雇ってくれたコンビニの店長が居たからである。

さて、あの男が俺をここに送ったからには、特別なことをしなくても『普通じゃない』生活が待ってるだろう。

まあ、まさか出勤一日目から『普通じゃない』事態に遭遇するとは思ってなかったが。

入るべき教室を確認し、溜め息が出た。
なんてお転婆なクラスなんだ。

ハア、と二度目の溜め息を吐きながら、俺はドアに挟まっていた黒板消しを取った。

一応とばかり下を見ると、糸が張ってある。
トラップを張ることにおいてはプロだな……

ドアを開きながら、糸を踏まないように教室に入った。
見渡せば、そこに居る者は全員美形……いや、普通の奴も居るな。

そこまで思考が及んだ所で、上から衝撃。
意識が一瞬、飛んだ。

意識が戻ってくると同時に、床が見えた。
どうやら俺は、床に手をつけているようだ。
グワングワンと鳴っているのは、今しがた落ちてきた金ドライ……
ドアの開閉と連動するタイプだったか。

「手加減する気ねえな、オイ」

思わず呟いた言葉に、後ろのダンディが笑っている気配。ファック。
何で最初っからこんな恥を晒さねばならんだ。

沸騰しかけた頭を、俺はなんとか落ち着けようとする。
大丈夫。ムカつく上司の嫌味なんて何百も受け流してきたじゃない
か。

余裕だ、余裕。

立ち上がり、俺は教壇に立つ。

実に、教室全体が良く見える。

ああ、小憎らしい笑顔を向ける双子とか、興味津々な目で見てくるパイナップルとかな！

未だに笑いを堪えてるノーテンキそうな奴とか、頭に来てしようがないが、我慢だ。

「新たに副担任になりました。斉藤康平です。どうぞよろしく」

なーんで、俺が副担任なのかねえ……

「……学園長。本気ですか？」

「本気も本気じゃよ。君なら何かあっても抑えられるじゃろう？」

フッフッフッフオと、どこかの宇宙人のようにぬらりひょんが笑う。それを厳しい目で見る、高畑・T・タカミチ。

「僕が出張の時はどうするんです！ 大事になってからでは……！」

「龍宮君にでも依頼するわい。彼女も居ることじゃし」

「しかし、彼女が……いえ、そもそも封印されているでしょう」

尚も、高畑は危険を訴える。

しかし、学園長が意見を変えることは無い。

「彼女を甘く見過ぎじゃよ、高畑君。時の重みは軽くないぞい」

そう言って、学園長は高畑を退室させた。

すぐに、件の彼が来る時間だったのだから。

「出身は？」

「H県のW市」

「好きなものは？」

「娯楽全般。ただし、『道』と付くスポーツはあまり好きじゃない」

「嫌いなものは？」

「縛られること。結婚もあんまりしたくない」

「では、この中に好みのタイプは居ますか？」

「んー、じゃあ、全員」

「……ありがとうございました」

明らかに真面目に答えなかった最後の答えに残念そうな顔をされたが、コイツに好かれたい訳でなし、良しとしておこう。

キーンコーンと、チャイムが鳴り、俺が次回から授業を始めることを告げた時には、既に大多数の意識は俺に向いていなかった。

まあ、学生なんてこんなもんだ。

さっと、荷物を纏めて次のクラスへ。

3つのクラスの数学をいきなり任せるとか、これも中々無いんじゃない？

……いや、これは有り得るな。普通に。

(何も感じない……高畑先生も鈍っているのか?)

もしかしたら『黒』かもしれない……そう、担任に告げられて頭に浮かんだのは、幼馴染の顔。

絶対に、お嬢様を危険に晒す訳にはいかない、と新副担任を注視した。

だが、その結果は『白』だ。

逆に『黒』であることが有り得ない程の普通っぷり。

足運びも、身のこなしも、危険察知も、魔力も、気も、何もかもが。

しかし、一つだけ気になる点があるとしたら、『道』と付くスポーツが嫌いという一言。

日本人なら馴染み深い、剣道や柔道、弓道などが嫌いというのは珍しい。

私自身、剣道をやっているということもあるし、その理由に個人的に興味を沸いた。

「先生。質問したいことがあるんですが、お時間よろしいでしょうか」

「ん？ えーと、桜崎か。時間なら問題ないぞ」

……今、発音がおかしかった。

正確に覚えてないな、この人……

「先生が自己紹介の時に言った、『道』の付くスポーツが嫌い、という発言について。理由を聞きたいと思ひまして」

「ああ、桜崎は剣道やってたか。ちょっと長い話になるが、構わんか？」

その問いに、私は首肯で返した。

「その昔……俺も結構、ヤンチャしてたんだ。

それで、じ……いや先生に性根を叩き直すと称されて、剣道をやらされたんだ。

ルールも何も教えられずに、反則を取られまくって、良く分からない内にボコボコにされた。

まあ、更生はできたが……おかげで、剣道は勿論嫌いになったし、『道』と付くスポーツも嫌いになったのさ」

ありがとうございますと、と告げて、私は教室へと足を向けた。

ヤンチャ……まさか、封印されている妖怪の類か？

それならば、気も魔力も感じないのは説明が付く。

じ……と言いかけたのは『じじい』か。

それだけ、親しかったのだと予想も付く。

つまり、暴れ回っていた妖怪が法師に封印され、まともになった……ということか。

昔、というのが何年くらい昔か分からないが、何百と年を重ねていたら、私も対抗できるかどうか……

学園長が副担任に抜擢した、というのは高畑先生から聞いた。

学園長の考えなら、放置するのが妥当だろう。
……それでも、お嬢様を守る為に目は離せないな……

職員寮の一室が与えられました。やったね！
これでネットカフェ難民から脱出出来た……

最初はね、舐めてたんですよ。
ホテルに泊まってるやいいだろうって。

思ったよりホテル高いんだよね。うん。
資金が尽きるのが早すぎた……

まあ、気を取り直してバリバリ働こう。
多分、これからもレベルは上がっていくはずだ。

既にレベルは7。

『呪言マスタリー』を3まで上げ、『睡眠の呪言』をマスターした。
『力祓いの呪言』も2まで取ったのだが、『睡眠の呪言』という字
を見つけて方向転換した。

呪言や技などを使うにはTPが必要ということなので、『TPブー
スト』も1だけ取っている。
というより、スキルポイントが足りない。

刀のスキルも取りたいんだがなあ……

刀が無いから、今は取っても無駄なスキルになってしまっ。
まあ、これは今後に……

「あ、桜崎にでも聞くか」

剣道部ならそういう伝手も知ってるかもしれない。
剣道に詳しくないから、本当にそうかは知らないが。

剣道やってるなら、刀が好きだということも有り得るし、他の奴に
聞くより可能性は高いだろ。

まあ、知らない可能性もあるし……ネット引いて情報収集するかな。
うん。

教え子に勘違いされるだけの簡単なお仕事です（後書き）

多分、次回くらいに刹那の名前を訂正させます。本人に。

停電の日も止まらない(前書き)

実は、漫画で高畑が瀬流彦を呼ぶシーンは無いようなのですが……
まあ、取り敢えずコレで。

停電の日も止まらない

ついに、パソコン買っちゃいました。

ネットも引いた。

これで思う存分楽しめるぜ！ と意気込んで、俺はパソコンを起動した。

カリカリカリカリと言う音と共に、あのマークが画面に浮かぶ。

しかし、そんな時に限って俺は不幸だった。

突然、麻帆良全域に向かって放送が流れた。

『こちらは放送部です。これより学園内は停電となります……』

「なん……だと……」

俺が呆然と画面に振り返ると、『ようこそ』という字が画面に浮かんでいた。

まだ、初期設定も済んでいないのに……！

俺は肩を落しながらパソコンの電源を落とした。

ハア、と溜め息を一つ。

レベルが10に上がった代わりに、俺のストレスは（主に2・Aのせいで）マツハである。

このストレスをどうやって解消しろと言うんだ……

ハア、ともう一つ溜め息を吐きながら、俺は窓の外を見上げた。空には、丸く丸く、美しい月が浮かんでいた。

「……よし、今日は月見酒だ」

酒瓶を2、3本引っ搦んで、俺は玄関に向かった。

……暇だ。

ほんっとうに暇だ。

新任の先生が『黒』である可能性があるということ、その狙いについて散々論議が交わされた。

結論は、『停電時の守りが薄くなった時、外からの攻撃に内応するのでは?』というもの。

そこで『それならば停電時に監視する人員を置くべきだ』という意見が出て、結果的に僕が選ばれた。

僕自身、彼と話してみたが、いわゆる『悪』に走るものに特有の陰は感じられなかった。

というよりも、むしろ善良と言って良い。

学園長もそろそろお年だし、判断は少し若い者に任せるべきじゃない

いかな。

……というか、これが冤罪だったら停電のことを知らせなかった事とか問題になるんじゃないかな！。

ふらり、と影が一つ。

職員寮の前に現れた。

「あれは……」

何故だ！？

まさか、あれは演技だったとでも言うのか！？

そこに居たのは、新任の斉藤先生だった。

暗がりに居て判別しにくいのが、あれは棍棒か？

しかも、それを何本も……戦闘スタイルは特異なものであると、予想できる。

早く、学園長に連絡を　！　そう考えて、携帯に手をやった僕は戦慄した。

ゆらりゆらりと歩いていた斉藤先生が……首だけを動かして僕を見やったのだ。

一瞬、顔を曇らせて、舌打ちでもしたような顔で　！

何故だ！？　連絡しようとしたことを！　察知したとでも言うのか！？

有り得ない有り得ない有り得ない

僕はしばらくの間、携帯を取り落としたことにも気付かないで震えていた。

「どこで飲もうかなあ」

独り言を呟いてはみたが、答えてくれる人は居ない。

先ほど寮の前で月が見えるか確認したが、見えなかった。

現在の月の高さからすると、見える場所は少ないだろうとは思っていたが……

寮の屋上は封鎖されているから、行ったことは無いしな。

ふむ。あのデカイ橋なら、周りに障害物も無いしちょうど良いかもな。

あの橋の名前はなんだったかな？ 麻帆良大橋だったけ？

答えは出ないまま、俺はそのまま歩き続けた。

「瀬流彦くん？ ああ………何？ 分かった。気を付ける」

携帯を懐にしまい、ポケットに手を入れる。
目の前には既に、刀を持った男が居た。

「話は終わったんかいな？」

「ああ。待たせて済まなかったね」

この男は確か……魔力の籠った品を次々に奪って、指名手配されていたはずだ。

狙いは世界樹か？

「じゃあ、行くで？」

その瞬間、男が瞬動で突っ込んでくる。
一直線に向かってきた男を、僕は当然迎撃する。

居合い拳。

拳庄のみを飛ばす、不可視の技だ。

あわや当たるか、というところで男は地面を蹴り、方向を変えた。
上に飛び上がり、そのまま落ちてくる！

この距離では居合い拳は使えない！
素手で迎え撃つ！

そう決めた瞬間に、僕は右手と左手を合わせた。

交錯は一瞬。

僕の拳が、刀ごと男の体を殴り飛ばした。

後ろからパチパチと拍手が聞こえる。

まさか！

振り返ってみれば、そこに居たのは斉藤先生。

報告にあったような武器は持っていないが……

「いやー、強いんですね。その人は不法侵入者ですか？」

白々しい。

さっきの戦闘を見て、作戦を変える気か？

「……ええ。そんなところです」

「この暗さなら、どこから侵入するのか分からないとでも考えたのかもしれませんけど……」

折角良い月夜なんですから、勘弁してもらいたいですねえ」

そういつて、斉藤先生は横を見上げた。

ふと、つられて同じ方を見る。
そこには、満月でこそないが、美しい月が浮かんでいた。

「現代じゃ、夜でも明るいですからね。
こんな綺麗な月は中々見れません」

視線を戻すと、斉藤先生は足元から酒瓶を持ち上げた。
……いや、待て。何本持ってきたんだ。
棍棒とはまさかコレか！ 暗がりだからって間違えたな！
くん！
瀬流彦

「高畑先生もどうですか？ 一杯」

どこから出したんだ、そのお猪口。
僕は苦笑しながら、一杯だけ月見酒に付き合った。

停電の日も止まらない（後書き）

ちなみに、斉藤さんは停電の件は知らされてませんでした。
その為、パトロールも無しです。

数々のオリ魔法先生が居ますが、真面目にパトロールしてる人は一人も見ることがありません。
一人ぐらい居ても良いじゃん？

高畑仕事しろオー！（前書き）

出張ばかりって、あの人は本当に教師なんでしょうか……
というより、本当に担任だったんでしょうか……

高畑仕事しろォー!

もうすぐ梅雨になるうかという頃、私は副担任に呼び出された。流石にそろそろ名前も覚えなおしていると思いたかった。

「おー、来たか。桜崎」

「……先生。私の名前は桜が咲くと書いて、桜咲です」

「えー!? ほんと? すまんすまん」

あちゃー、などと呟きながら頭をかいている様子からして、わざとではなかったようですが……

……いや、それより早く用件を言って貰えないだろうか。私の不満を察したように、斉藤先生はこちらに向き直った。

「それで用件というのはだな……お前が一番伸びそうだからな」

「!? な、何がですか?」

まさか、私がハーフであることに気付いたのか?

エヴァンジェリンさんの強さは殆ど完結していることまで見抜いて、私に声をかけたなら……

「数学だよ、数学。バカ五人組に特別授業したんだが、全く理解してる風には見えん」

「は？ あー、あの五人に教え込むのは難しいでしょうね」

は、早とちりだった。

私が思ったより、この人先生してる！

特別授業ということは、放課後の時間を使っての補習授業だろう。余程生徒のことを心配してなければ、自分の時間を使って授業をしようなんて思えない！

「まあ、あの五人に個別に作った教材渡した以上、他の生徒と区別する訳にいかんからな。まずは下の方から苦手分野克服プリントを渡していくことにした訳だ」

にがてぶんや？ こくふく？

えーと、つまり……？

……まさか宿題ですか？

「成績見たけどな。もう少し頑張れよ桜咲。せめて五百位以上だ」

「せ、せやこと言われはつても……はっ！？」

「なるほど。それがお前の素か」

しまった！？ うっかり素が出たー！？
確かにちよつとまずいなーとは、自分でも思っていたけど！

「丁寧語で取り繕ってないで、自分を出せよもっと。近衛とも仲良くしたいんじゃないのか？」

「え、何でいきなりそんな……」

「近衛から距離取ってるのぐらい見え見えだ。他の奴と絡んでる様子もあまり無かったが、近衛は特にだ」

い、意外と観察力があるな……HRと授業の時以外に、先生と会った覚えは無いんだが。

というより……何をどこまで気付かれたんだ？
はっきりした単語が出ないから、余計に混乱する。

「近衛は嫌われるような人柄してないからな。お前の側に特別な何かがあるんだろ？」

それが何かまでは、俺は詮索しない」

せ、先生……高畑先生のように、度々言ってくるでもなし、そつとしておいてくれたのは、先生が……

「だから、勉強頑張れ」

「え、は、ゑ？」

私の手に、どさどさと落ちてくる大量のプリント。

左上に日付が振られているが、これは　！？

「数学の、お前が出来てないところだ。一日30分やれば終わるよ
うにしてある」

「

開いた口が、塞がらない。

え、この枚数を？　本当に終わるの？

「今度の授業から、始めに復習テストするからな。ちゃんとやって
こいよ」

わ、私の感動は、どこにやればいいんですか……？

生徒のことをよく考えているのは分かりましたけど……私の感動……

俺は、職員室の入り口でコーヒーカップを持って、ジッとある人を待っていた。
情報が確かなら、そろそろ来るはずだ。

よし、足音が聞こえてきた。

職員室の扉が開いた。

そこに立っていたのは、我がクラスの担任。高畑・ダンディ・タカミチだ（嘘）

「今、帰ってきたんですか？ 高畑先生」

「ええ。空港から直接来たんで、本音を言えばもう帰りたいんですけどね」

学園長にはもう参ったよー、とダンディは手近な椅子に腰掛けた。
直ぐ様、近くの机にしずな先生がコーヒーを置く。
……仲良いな、アンタら。

「それでは、僕は少し申し訳なくなるな。現実を見せなければいけない」

「え、もしかして……いや、待ってくれ斉藤先生。明日でも構わ
ない」

「いーえ、今です。英語の居残り補習授業。出てもらいますよ」

2 - A の英語の授業には代わりの先生が出ていたのだが、その授業では最底辺の五人組が追い付かなくなったのだ。聞けば授業を全く理解出来ていない様子。

こんな調子では学園生活を本当に楽しむことなど出来ない！ と新田先生をまず説き伏せた。

新田先生は涙を流しながら、代わりの英語教師に2 - A の居残り補習授業をやってくれるように、一緒に説得してくれた。

俺と新田先生のデュエットで教育論を語られたその先生は、何だか遠い目をしながらも賛同してくれた。

……だが、いくらやっても理解してくれない五人組に疲れてしまったのだらう。

つい先程、帰宅逃げ出したのだ。

新田先生が熱血した様子で代わりにやっているが、本職の英語教師でない以上限界はある。

「という訳で、本職が英語教師の高畑先生。帰ってきて早々悪いですが、授業に出てもらいます」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！？ 僕はホントに疲れてっ！」

「どうか高畑先生、犠牲になって下さい。僕の給料アップの為に」

「ちょっ！？」

話は二日程前に遡る。

僕が学園長に給料の件で、直談判した時のことだ。

「学園長。2・Aを纏めるのは、他のクラスを纏めるより難しいことは確定的に明らかです。」

「ここは賛同して頂けますね？」

「うむ。まあ、良くも悪くも個性溢れた子達じゃからな」

「したがって！ しょっちゅう出張している高畑先生も大変だということは分かりますが！」

新任の私に実質担任を任せているような形になっているのはおかしいと思いませんか！？」

「う、うむ。確かに新任にも関わらず、斉藤先生は良くやってくれておると、わしも思っておる」

「でしたら、給料をもう少し上げて頂きたい」

キュピーン、と学園長の目が鋭くなる。

猛禽類のような目……少し真剣になったようだ。

「じゃが、斉藤先生。本当に2・Aを纏めきれているのかな？」

「どごいう、意味でしょうか」

「うむ。実は2・Aは中間、期末などのテストで万年最下位での…」

…」

「それが……どういふ関係があるんです？」

「次の中間テスト……2 - Aが最下位を脱出したら、給料アップを認めよう！」

「!?!」

あまりの衝撃に、俺の口が『お』の形のまま固まった。
勿論、直ぐに再起動した俺は、口撃を再開した。

「次の中間テスト!? それは7月のことでしょう！」

「む、何か不満かの？」

「それでは余りにも遅い……ですが、良いでしょう」

「納得してくれたかの？」

フオフオフオとどこぞの宇宙人のような笑い声を上げる学園長。
だが、俺のターンは終了してない!

「それとは別に、10%の給料アップを要求します！」

「ふおっ!?!」

「HRだけの僅かな時間でも、あのクラスを抑えておくのは相当なストレスです！」

この分の報償は、無ければおかしいでしょう！」

「ぐ、ぐぬぬ……（た、確かに遠見で見た時は凄まじい喧騒じゃった……が、しかし……）」

学園長は黙り込んでしまった。

俺も中々良い所を突いたと思うのだが、こちらは交渉は素人だ。学園長にまだ上を行かれる可能性は高い。

「良いじゃろう。5%の給料アップを認める」

「あ、ありがとうございます……5ぱーせんとう？」

「うむ。無事に最下位を脱出した折には、合計で20%の給料アップを認めよう。これからも頑張ってくれ」

く、くそ。

30%くらい行けるかと思ったのに、そこそこ妥当な線で先に防衛ラインを引かれた！

これを越えるのは難しい……！

「……という訳です。その後高畑先生の給料アップも申請しておき

ましたので、頑張ってください」

「ちょ、ちょっと待ってください！ これ以上忙しくなったら、お金が有っても使う機会が！」

「最終的に、僕は給料が増えればいいんです。高畑先生も教え子が賢くなつて一石二鳥ですよ？」

教育者として、それ以上の反論が難しかったのか、高畑先生は頂垂れてしまった。
犠牲になってください。僕の給料の為にっ！

高畑仕事しろオー！（後書き）

という訳で、ただちょっと3-Aが賢くなりましたよ、という話。特に下位組。

エヴァはやる気が無いだけなのを、見抜かれています。

茶々丸は本気でやってあの順位なのでしょうが……エヴァに命令されていているとか？

……あと、ザジとは会話が成り立たないので、課題だけ渡しました。

というか、原作見ると明日菜と柿崎美砂の仲が良さそうなのは1巻だけ……

みんなそこそこ仲が良く、ただ描写されてないだけって可能性も無くは無いです。

原作読み直してたら、ハルナー人だけアホ毛wwww

触角www

クラス名簿の所だけで、突っ込むとこだらけだwwww

夏休み直前から、半ばまで（前書き）

なんでこいつらは、こんなに書きにくいんだろっ……31人も居るからか。

しずな先生って、魔法に関わってるよね？

学園長が目の前で立派な魔法使い、とか言ってるし。

夏休み直前から、半ばまで

そして、夏休みが始まるまで、あと三日

中間テストにおいて、2 - Aは見事に最下位を脱出した。

……まあ、女子中等部の第二学年だけで、24クラスあるからな。その中で一つ順位を上げる……真面目に勉強させれば、普通に達成出来る。」

特に2 - Aは、学年トップクラスの頭脳が居る。

底が上がれば、自動的に順位も上がるのである。

言い方は悪いが、足を引っ張る奴が居なくなるだけで、十分に全体の成績は良くなる。」

「さて、最下位脱出。おめでとう諸君」

「いやー、先生のおかげッスよ。バカレンジャーの成績が上がるだけ……」

「ちょっとー、私はもうバカじゃないわよ」

「いーえ、アスナさんはいつまでたっても、おサルさんですわ」

「なんだとこのシヨタコンがー！」

一言喋っただけなのに、すぐ大騒ぎになる。

ちよつと春日がバカレンジャーの話題を出したただけなのになー。
気のせいかな。俺の胃が軋みをあげているよ。

「騒ぐなバカ二名！」

「ちよつ！？ 斉藤先生、今私のことを『バカ』と？」

「アンタなんか、バカで十分……」

「すぐ喧嘩を売るな！ だからお前はアホなのだ！」

「むう……分かったわよ。黙れば良いんでしょー？」

雪広がまだ微妙に納得していない様子だったが、神楽坂が素直に座
つたのを見て、席に戻った。

はあ……ようやく話が出る。マジ高畑仕事しろ。

「さて先日のテストだが……2-Gがトップだったのは知っている
か？」

「もう、トップの話は良いよおー。ボクたち22位だよー？」

「お姉ちゃん。先生にはちゃんと敬語使わないと……」

また騒ぎが始まりそうなので、手を一度打ち鳴らす。

パン！ という音に、よそを向いていた長谷川が、ビクツと震えた。

「この学校では、素敵なことにちよくちよくギャンブルが行われている……平和に終わってるから、漏らす気は無いが」

お、さっきこちらに向き直った長谷川が、ちょっと反応した。博打が法に触れるっていう意識があるのは、長谷川だけかあ。

国が認可を下ろしているなら良いんだけどな。競馬とか。

ていうか、エヴァンジェリンとか龍宮とかは、目が『長話してないで終わらせる』って言うてる気がする。

むしろ、エヴァンジェリンは睨んできてる気もするけどっ！ 外見年齢の割に迫力が凄いんですけどっ！

「……もう話に飽きた奴が居るようだから、結論から言おう。G組に食券100枚賭けてたんだ」

数秒の静寂……話が飲み込めてない？ それとも計算してる？

100枚って区切りが良いから、計算は簡単なはずなんだがなあー！

『えええええええー！？』

クラス全体での驚愕。あ、エヴァンジェリンとか、後ろの方に居る奴は目を見開いてるだけだな。

「ちょ、ちょっと待って下さい。G組の配当は3・0倍……300枚ですか!？」

「ああ。増えた200枚で、焼肉でもおごろうと思うんだが、どうだ？」

「え、ええー。うちのクラスばかり悪いですー」

宮崎が小さな声で意見を言ってるようだが、聞こえんなあ。

それに、トトカルチョが許されるのに、担任が自分のクラスを優遇するのが許されない、なんてことなかるう。

「予定がある奴も居るだろうから、強制はしない。タダ飯食いたい奴は、六時に噴水のとこなー」

『はい!』

大多数は元気の良い返事をした……あくまで多数だが。

まあ、問題ではない。にぎやかなのが嫌いなのかも、しれないし。エヴァンジェリンなんかはそうだな。『馴れ合いなぞするか』とか言いそう。

「それじゃ、今日のHRはこれで終わりだ。日直、号令」

今日の日直は……柿崎か。あの三人組の。

「きりーつ。礼」

『さよーならー！』

「はい。じゃ、焼肉の予約してくる」

教卓の上の荷物は、それほど多くはない。

さっさとカバンに纏めて、俺は教室を出て、職員室に向かう。後ろからは、2・Aの中での喧騒が聞こえてきた。

「茶々丸。どうだ？」

「不自然な点は見付きりません。裏の人間では有り得ないと判断します」

「そうか。やはり経歴から探すよりは……」

麻帆良学園の一室。

パソコンが並ぶその部屋に、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルと絡繰茶々丸が居た。

エヴァンジェリンがただ、茶々丸の側に立っているのに対して、茶々丸はパソコンをずっと操作している。

「かといって、奴が裏の人間ではないというのは、不自然だ。奴の身のこなしは、洗練されてきている」

エヴァンジェリンはここ最近の、斉藤康平の様子を思い浮かべる。教室に入ってくる時。教室から出て行く時。

着任当初は、ブレていた正中線が、ここ最近になってブレなくなっ

た。

あれは、武道をやっている者の身のこなしだ。

しかし、本人も言うように、武道をやっているようではない。ならば、アレは 戦闘者だ。

「経歴から辿れない……となれば、麻帆良にやって来てから、巻き込まれた、か。不運な男だ」

エヴァンジェリンは、2・Aを纏める男の顔を思い出して苦笑する。学園長じゅうから聞いた、中間テストで最下位を脱出したら、給料を上げるという約束をした話。

全くもって普通の、俗物と言ってもいい彼。

「 ああ。実に不運な男だ」

エヴァンジェリンが、茶々丸を伴って部屋を出て行く。堂々とした、王者の歩きで。

夏休みに入っても出張続きで、僕には休みは無い。

そんな中、ようやく数日間の休みが取れた。

さてどうするか、と考えていると、斉藤先生がやってきた。

瀬流彦先生などを呼んで、みんなで飲まないか？ と。

家で飲むということ、何かあるのかと疑ったが、新田先生も呼ぶと言っていたので、裏に関係することではないらしい。それならば良いだろう、とOKを出したが……

「いえ、高畑先生も大変なのは、重々承知です。しかし、それでは2-Aの生徒が！」

「そうです。新任の俺が、あのクラスを纏めるのが、どんなに大変かを考えてですね」

「まあまあ……二人共落ち着いて下さい」

「斉藤先生はよくやってくれているんですよ、高畑先生！ 出張が多く、大変なのは分かりますがね！」

(うわぁ、カラミ酒だよ。この人)

なんでガンドルフィーニさんまで居るんだろっ……
あ、瀬流彦くん。小声で言ったつもりなんだろっけど、僕には聞こえてるから。

新田先生は熱い教育論を語ってくるし……立派な人なんだけどね？
うん。

斉藤先生は、新田先生を煽っているように見えるんだが……気のせいだよな？

ガンドルフィーニさんも含めて、ほとんどの先生は、僕の出張の理由を知らない。
だから、斉藤先生の境遇に憤るのは、まあ分かるんだけど……

……結局、目的は何だ？
まさか、本当に酒が飲みたいだけ？

その日はそのまま次の日まで飲み続け、僕は二日酔いで痛む頭を抑えながら、美術部に顔を出しにいった。
……まさか、焼酎を4Lペットボトルで出してくるとは思わなかったよ。

夏休み直前から、半ばまで（後書き）

東方不敗は王者の風よ！ ……いえ、言ってみただけです。

ぜってー麻帆良おかしって。

ギャンブルが普通に行われてるもん。

刀マスター！取ったら、正中線がブレなくなっただでござるの巻です。
ツバメ返し取るまでは長いな！。

これ書きながら、11曲の個人的選曲による燃える曲を聴いてたんですが、どうでしょう？

作風に違いとか出てますかね？

ロマンスは燃える曲に入れても良いと思います（恋愛的な意味で）

僕が！抱きしめてあげる！

ネギ襲来（前書き）

今回の斉藤くんの推論は、良くも悪くも、学園長の後頭部を疑問に思っただのが始まりです。

ぜってえ、あの人は人間じゃねえって……

ネギ襲来

夏休みが終わり、二学期が始まってからも、俺は教育に励んでいた。……レベル上げを兼ねて？

もう最近では、高畑が全く頼りにならないので、自分の主旨がどっちにあるのか、自分でも分からない。教育も兼ねたレベル上げなのか、レベル上げを兼ねた教育なのか。ホントに、俺が来る前はどやっていたのか知りたくなるくらい。

しかし、三学期に入ってから、高畑のがマシだと思ってる事態に遭遇した。

「この度、この学園で英語の教師をやることになりました。ネギ・スプリングフィールドです……」

「いや、ねーよ」

「……え？」

うん。つい、本音が出ちゃったんだ。

あの詳細不明の男が言ったように、波乱万丈奇々怪々、奇想天外吃驚仰天の日々が、この日から始まる

ようやく年齢が二桁になるぐらいの少年が、教師になるって来たら、そりゃ吃驚仰天だよ！！

学園長室に、少年と一緒にいき、俺はソファで頂垂れた。

主に、これから遭遇するであろう出来事によって、俺に生ずる『ストレス』に対して。

「なるほど、修行の為に日本で学校の先生を……そりゃ大変な課題をもろつたのー」

『修行』ってなんだよ！？ 『課題』ってなんだよ！

「文句ついでに言いますけど、学園長って人間じゃないですよね？」

「フオツ！？ なんで人間じゃないことが前提なんじゃっ！？」

ネギと名乗る少年も、やっぱりとか言ってるじゃないか。

明日菜は恩義があるからか、フォローしてるけど。

「ゴホン。ネギ君、この修行はおそらく大変じゃぞ」

気を取り直して、また学園長は喋り出した。

要約すると、チャンスは一度だけどやるか？ である。

そんなゴチャゴチャした情報要らないだろ。

故郷に帰らなきゃ、とかさ。それ個人の意思でどうにでもなるんじゃないね？

まあ、この少年の場合は、まだ親に養ってもらっているのが、普通の年頃だからしょうがないか？

「では、しずな君」

学園長が呼ぶと、ドアが開き、しずな先生が入ってくる……オイ。しずな先生いいいい！？」あー、ごめんなさい』じゃないですそれえええ！？」

胸に挟まれるとか、むしろこちらが……おっと、視線に気付かれた。

しずな先生が睨んでくる一瞬前に、俺は学園長に向き直る。

ちよつと怒気を感じたが、エヴァンジェリンの殺気に比べれば軽いものだ。

……アレと比べたら、大抵のものは軽い気もするけどなー。

「それともう一つ。このかにアスナちゃん。しばらくはネギ君を部屋に……」

「ちよつと待って下さい、学園長」

「むう。なんじゃ？ 斉藤君」

学園長は恐らく、『部屋に泊めてやって欲しい』と繋げる気だったのだろう。
でなければ、しばらく、とか付かない。

「教員寮は確かに、一昨日満室になりました」

「うむ。そうじゃな」

「ですが！ 教師と生徒が同じ部屋、しかも異性というのは如何なものかと」

「むう、じゃがなあ……」

フフフ。ぬらりひよんの魂胆見切ったり。

この状況は一から十まで異常。ならば、それ以前に学園の運営サイドに『異常』があることは予測しやすい。

その『異常』の筆頭は、学園長と名乗るぬらりひよ……学園長だ。

さらに、先程のネギ少年のくしゃみ騒動を合わせて考えると……

こいつら、超常現象を操る能力の持ち主じゃね？ となる。

さらにさらに、俺をこの世界に飛ばしたあの詳細不明の言うことを考慮に入れよう。

おそらくこの少年は『主人公』または、それに近い存在である。

そして、赴任先は女子中学校……これは女の子とエッチなこととしてパワーアップ！ みたいな作品が原作か？

少々、酷い見方であることは自覚しているが、これはかなり真実に

近い推論ではないだろうか。

「なんなら、僕の部屋でも良いでしょう。2 - Aの教育方針に関して、意見を戦わせることも出来ますし」

「しかし、君の部屋に二人では、少々手狭ではないか？」

「生徒の部屋に、異性の教師を同居させるよりはマシでしょうよ」

明日菜が後ろから、そーだそーだと声援を送ってくる。

……そこまで、ネギ少年が嫌いか。

まあ、ダンディが好きなのは察せるけど、そこから子供を嫌いになるものかね？

つくづく思春期は分からん。

その後、ネギ少年は俺の部屋に住むことが決定した。

明日菜は、ネギ少年に何ごとか言った後、木乃香と一緒に走っていつてしまうし……

もうちょっと落ち着いてくれないかな。最近、薬局の常連と化してるんだけど……

「ああ。担任がネギ先生に代わったんでしたね。これ、クラス名簿です」

「あ、どうも」

「そういえば、クラス名簿に高畑先生が私信のようなものを書いていたのですが……」

「え！？ タカミチが！？」

慌てた様子で、ネギ少年はクラス名簿を開いた。

が、そこに余計な情報は一切記入されていない。

「引継ぎの為の公的なことを書くのでなければ、この国では罪に問われるようなので消しておきました」

「あ、あつうっ……」

「……そんなに落ち込まなくても、コピーは取っておきましたよ」

なんなんだ、この少年は。テンションの上がり下がりが激しいな。ちなみに、消したといっても、相坂と絡繰のところの記述は残している。

この二つだけは、真面目に引き継ぎの為の事項のようだし。

……困った時に相談しなさいとか、思い切り私信だよなあ。

「いっぱい……ですね」

クラス名簿を見て、続いて教室内を見て、ネギ少年は不安そうな顔

をする。

なんというか、庇護欲をかき立てられる顔だ。

「とはいっても、新任の僕が纏められるクラスですから、ネギ先生も頑張れば出来ますよ」

そこで心にもないフォローをすると、よしと気合を入れる。そして、ドアをノックして……そこで、俺が右手で肩を抑えた。

「え、何ですか？ 斉藤先生」

「上を見てください」

え？ とネギ少年が見上げると、そこにはドアに挟まれた黒板消し。あのまま入っていたら、確実に頭に命中していた。

「あ、危なかった……」

「あと、下も見てくださいね。黒板消しは布石です」

そこには、一本の糸が張られている。

黒板消しを発見出来なければ、チョークの粉塗れに。

発見されても、上に注意を向けさせることで、糸にひっかかるという、二重のトラップ！

「このぐらいは発見出来なければ、このクラスではやっていけません」

俺は勢いよく、ドアを開く。

まず黒板消しが落ちてくるのを、上から追いかけるようにキャッチ。そして、糸を思い切り踏みつける。

そこで、バケツが降って来た上に、矢が飛んでくる。

バケツの中身が赤い……俺用のトウガラシか。

こんな少年だとまでは、朝倉も掴んでいなかったらしい。

「ワナは全部潰しました。ネギ先生、どうぞ」

「え、入って大丈夫なんですか……？」

「……念のため、糸には触れないように」

あうあうと言いながら、ネギ少年は涙目のまま、教室に侵入する。雪広の目がハートマークになったのは、見ていないことにしたい。

「あの、斉藤先生……つかぬことを」

「本題を言え、雪広。多分想像通りだ」

「で、では、この方が新しい担任ということに……！」

「ああ。じゃあ、ネギ先生。自己紹介を」

何やらネギ少年は緊張しているようで、教卓で教室全体を見て……
覚悟を決めたようだ。

喉を鳴らし、小さく深呼吸し、喋り出す。

「今日から、この学校でま……英語を教えることになりました。ネギ・スプリングフィールドです」

その後の言葉は続かなかった。

キヤアアアという、生徒一同の黄色い声にかき消されてしまったから。

教卓に寄ってくる生徒を見て、俺は溜め息を吐きながらも対応する。

手を、ただ二回打ち鳴らすだけ。

しかし、それも単純故に効果がある。

単純に、何度も繰り返したことによる学習効果。

この手を打ち鳴らす行為と共に、これまで言ってきた言葉は『ちよつと黙れ』だ。

この一年近く繰り返した行為によって、今回も生徒を止めることに成功した。

「う、その……分かりました」

朝倉も引いてくれたようで、結構。
なんとなく予感がしたんだよな！。

……ネギ少年が、女子中学生にもみくちやにされるような、凄く具
体的な予感。

シット！ 実に妬ましい。刀子先生にアタックしてみようかな！。

さて、生徒が全員席に戻ったのを確認して、俺は手で、ネギ少年に
続きを促した。

それでも、最初の出鼻をくじかれたのもあってか、ネギ少年の様子は
芳しくない。

「では、ネギ先生。着任に当たつての、抱負を聞かせてもらいまし
よう」

「え、あ、はい。えっと、2・Aの皆さん。三学期の間だけですが、
精一杯頑張ります。よろしくお願いしますー！」

クラスのあちらこちらで、拍手をする生徒が出始める。
中々に歓迎ムードだな。

未だにわたわたしているネギ少年に、俺は小声で続きを促す。

「ほら、ネギ先生。出身地とか、好きなものとか、趣味だとか。言
うことなんていっぱいありますよ」

「はい。えと、僕はイギリスのウェールズ出身で……」

やれやれ。やっと調子が出始めたようだ。

……この年で紅茶ねえ。さすがイギリス人、というべきかな？
おっと、そろそろやばいな。ネギ少年が教師になるから、授業も多少の遅れを見込んでおかなければ。

「ネギ先生。クラスに慣れ始めたのは、実に結構ですが、そろそろ授業を始めないと」

「あ、そうですね。じゃ、えーと、テキストの……」

英語は全く分からないし、そろそろお暇しますかね。
三時間目までは授業も無いし、書類片付けますか！。

ネギ襲来（後書き）

クラス名簿など、公的な書類に私的な書き込みをすると、罪に問われるそうです。

麻帆良の中では、なあなあで済ませてるんだろっなあ。

トラブルやらテストやら（前書き）

1巻と2巻の内容は流します。

勘違いも無いし、バトルも無いし。

点数が上がっているのは、斉藤さんの功績です。

トラブルやらテストやら

何と言つべきか……あからさまにネギ少年の行動がおかしい。

「アスナさんのこと、前はどう思ってた？」

高畑の額に手を置きながら、ネギ少年は問いかける。

答えを聞くと、明日菜の方にトテトテと戻っていく……

あ、明日菜がずっとこけた。しかも、出て行っちゃったぞ。

ネギ少年もそれを追いかけていく……

ネギ少年の後ろ姿を、今度は雪広が追いかける。

……このクラス、本当に大丈夫だろうか。

「ネギ先生。ここが俺の部屋です」

「は、はい。今日からよろしくお願いします」

ネギ少年が寝る場所は、残念ながら確保出来ていない。

ベッドが来るまでは、俺はソファで寝ることになるだろう。

「ネギ先生。明日は早くから職員会議があります。ネギ先生は出なくて良いそうですが、その時間には起きてもらいます」

「えと、何時でしょうか？」

「朝ごはんを食べる時間を取って……六時半ですかね」

「えっ！ でもボク、今ちよつと時差ボケも……」

話を聞いていたのか、この少年は。

それを考慮したから、出なくて良いとされているのだが。

「ええ。分かっています。それでも、一週間もすれば会議には出なければいけません。今の内に慣れておいた方が良いでしょう」

「うっ……分かりました」

「それでは、俺は先にソファで寝させてもらいますね」

え、というネギ少年の疑問の声を背に、俺はソファに寝転がった。スーツのままだが、問題無い。明日用のスーツはクローゼットの中だ。

それでは……お休み……

なんだこの騒ぎは。

ネギ少年を追い駆ける2・Aの連中を見て、俺はまた胃が軋みを上げるのを感じた。

あれは、やっぱり捕まえた方が良さだろうか。

ステータスを見ると、凄まじい勢いで経験値が増えていくが、そんなものより俺の胃が大変だ。

大丈夫。最近運動能力は上がっている。

あと少しでツバメ返しもレベル10になるところまでできているのだから、この程度はやり遂げられる。
静かに息を吐き、大きく息を吸う。

「なあにやってんだキサマらー！」

「きゃー！？ 斉藤が追ってきたー！」

「え？ 斉藤先生？ 助けてくださいー！？」

俺が介入したことで、より一層のカオスを生んだが、何も問題無く収まった。

……俺の胃エ……

「斉藤先生ー！」

あの騒動から数日後。

自分の席でまったりしていたところに、ネギ少年がやってきた。

「今日の放課後、居残り授業をしようと思うんですが」

「……………居残り？」

はて、そんなに成績が悪い生徒が……………居たなあ。

確かにちよつとは良くなったが、あの五人はまだギリギリ500位台くらい。

居残りもしょうがないか……………

「良いでしょう。ただし、最近物騒になってきていますから、なるべく早く切り上げて下さいね」

「え、物騒って……………？」

「桜通りの吸血鬼って噂、知りませんか？ 実際に被害が出ているから困ったものです」

噂の出所が学園長なのが怪しいんだがな。

いつもは健康な生徒が貧血で倒れているのは確かにおかしい。調べれば血液が抜かれていた、というのもおかしい。

でも、犯人はただの血液性愛なのかもしれない。

この状況で『吸血鬼』という結論に至っているのは、ファンタジーに毒されているとしか……………

「きゅ、吸血鬼ですかっ!?!」

「ええ。満月の晩にしか出ないそうなので、普段あまり警戒する必要は無いかもしれませんが……」

むむむ、とネギ少年が考え込む。

生徒に被害が及んだら、とか考えてるんだろうな。

年齢は低いが、真面目で実直だし。

……ただ、一般的に悪とされることに敏感なんだよな。

他人を傷つけるだとか……あ、吸血鬼の話も出すべきじゃなかったか？

「分かりました。生徒の安全は、僕が確保してみせますっ!」

「そんなに張り切る必要は無いと思いますけどね」

小さい体にやる気をみなぎらせて、ネギ少年は駆け出していった。

……俺がやることは無さそうだな。うん。

またまた数日後のことだ。

昼食を食べ終わった後、職員室で書類を片付けていたところだった。バタバタと廊下を走る音が聞こえ、俺はそれを注意しようと廊下に

向かった。

ドアに手をかけた途端、ドアが勢い良く開き、俺の腹に何かが突撃してきた。

ついさつき食べた昼食が逆流しようとするのを何とか抑え、俺は突撃してきた奴の頭を掴んだ。

「ふふふ。何で今日に限ってそんなに活発なんだあ？ 和泉」

「ち、違います！ 違ってます！」

「え、えーと！ 校内で暴行が！」

ああ？ と佐々木の方を見れば、確かに手にかすり傷が。和泉の頭にも、絆創膏が張ってあるが……暴行？

「アホかお前ら。先に保健室行け。というかそんなものを暴行とは呼べん」

しっしっ、と手で二人を追い払おうとすると、後ろから援護射撃が。

「え、ええ！？ そんな酷いことを誰が……」

「ネギ先生……かすり傷ですよ、こんなもの」

「ふ、二人は怪我をさせられたんですよ！」

いや、こんなのガキの喧嘩ですから。
傷は見えるだけまだマシ……見えない傷は、治療が難しい。

「とにかくだ。佐々木は保健室。和泉は治療が終わってるなら、案内しろ」

「は、はい」

先導する和泉に従って、俺とネギ少年は『暴行』とやらの現場に向かった。

……今にも走り出しそうだな、この少年は。
ちっとは落ち着けないのか。

「高等部の年増の方々はお引取り願えます？」

「な、なんですって！ もう一度言ってみなさいよ！」

「何度でも言っただけで差し上げます。もう年なんだから、運動は控えたらどうですか？」

「じ、このガキー！」

……あー。うん。
女性教員居なくて良かったな。

「ネギ先生。お手を拝借」

「え？」

頭の上にハテナを浮かべていたネギ少年も、俺が手を構えると理解したようだ。
慌てた様子で両手を構えた。

「それでは。よおー！」

掛け声に合わせて、俺とネギ少年の手が打ち鳴らされる。
パン！ という小気味のよい、それでいて大きな音で、場が一瞬硬直する。

「そこまでだお前ら。年のことを言ったら、キリがないぞ」

「え、いや、でもあっちが先に……」

「うるさいぞ、神楽坂。遠目だが、お前ボールを当ててたる。アウ
トだ。宿題追加」

「え、ええええええ！ 勘弁してよー！」

さて、と高等部の方に目を向けると、ネギ少年を見ながらひそひそ話をしていた。

……母性本能でも刺激されたかね？

「和泉から話は聞いたが……場所の取り合いとか、小学生かお前ら」

ミシッ、とリーダーらしき生徒の顔が固まった。

周りも少しばかりの違いはあるが、同じような表情をしている。

「お互いを尊重しましょう。みんな仲良くしましょう。こんな小学校で言われることだぞ」

「うう……はい……」

「お前らは場所を貸して欲しい、と言うだけで良かったんだ。最初から喧嘩腰で……」

その後、昼休みが終わる五分前まで続いた説教によって、高等部の面々は疲労困憊した様子で帰っていった。

五時間目無いから、延々やっても良かったんだが。

まあ、学生が授業受けないのも、ねえ？

ちなみに、その後ドッジボール勝負が有ったと聞いた時には驚いた。

あいつら説教受けた後だっていうのに、元気だねー。

もうすぐ期末テスト……という時になって、ネギ少年が提案をしてきた。

内容は、すぐそこまで期末テストが迫っている中、2 - Aに緊張感が足りない。勉強会をしましょう。

まあ、大まかに纏めたがこんな感じだ。

「まあ、良いんじゃないでしょうか。給料も上がりますし」

「え？」

おっと口が滑った。いけないなあ、ハツハツハ。

「2 - Aの成績が上がるのは、副担任として嬉しいことですから」

「そ、そうですね！ 嬉しいですよね！」

一瞬、ネギ少年の顔が強張った。

生徒の為ではなく、まさか自分の為に提案したのか？

ネギ少年に、2 - Aの成績が上がって利益があるかということ……

……学園長のせい、しか思いつかないなあ。

俺も大分、麻帆良に毒されてきているようだ。

「それでは、今日のHRはネギ先生の提案により、勉強会とする」

「みなさん！ 頑張って勉強していきましょー！」

突然のことに驚くものが多いが、雪広などは輝いた目でネギ少年を見詰めている。

「超と葉加瀬、それに雪広は皆に教えてやってくれ。……ほら、ネギ先生」

「超さん。葉加瀬さん。いいんちよさん。お願いしますね」

「はい！ かしこまりましたわ！」

雪広のテンションがぶっこわれた。
超はやれやれといった顔だし、葉加瀬もまたかー、と顔が雄弁に語っている。

そう。そこまでは上手くいっていた。

ええ。上手くいっていたんですよ、ホント。

「みんなー！ 大変だよー！ ネギ先生とバカレンジャーが行方不明に……！」

そんな声が、2-Aの教室から聞こえてきた。

……ふざけんな。折角給料UPの約束取り付けてきたのに。

少々乱暴に、俺はドアを開けた。

大きな音に、生徒達は動きを止める。

「お前らだけで……前の順位を上回る必要があるな」

「そ、そんなの幾らなんでも……無茶ですわ」

雪広が絶望したような顔で言うが、そんなことは無い。人間、為せば為るものである。

「そうだなあ……うん。今までが温かったんだ。全教科宿題を出そう」

「えええ！ そんなの理不尽だよ！ 横暴だよ！」

「黙れ鳴滝。俺も面倒なんだからなあ……」

取り敢えず、3つぐらいに分類するか。

元気が有り余ってる奴。普通の奴。疲れてる奴。

わざわざ個人に合わせて課題を調節するなんて、今後は絶対やりたくねえ。

そして、テスト後。

はつきり言つて、俺はこの一年で一番の衝撃を感じている。勿論、肉体的なものではなく、精神的なものだ。

「神楽坂が……平均80点越え……だと……」

「あ、ありえへん。うち、頭がどうにかなってしまったんやろか……」

「も、もしかして、明日は槍が降るかもですー」

「世界が……世界が滅びるアル……」

「もはや覚悟を決めるでござるよ」

「皆あんまりにも酷いでしょ、その態度は!」

こんなカオスな状況になった理由は、ネギ少年を追いかけてきたバカレンジャー+ の分の点数である。

学園長が2・A全体と合計するのを、すっかり忘れていたらしい。

優秀な宮崎や近衛が抜けた穴は、どうにもならなかった。

バカレンジャー + の面々の点数だけで、順位を維持することは出来た。

だが、ネギ少年の試験は『順位を上げること』
ものの見事に失敗だ。

そして、故郷に帰ろうとしたところに、バカレンジャー達が……もうバカじゃないんだけど、どう呼ぼう？

まあ、とにかくネギ少年に追いついた。

そこで、帰ろうとするネギ少年を説得していたところに、俺を伴った学園長が現れた、という訳だ。

何故、一部始終を知っているかって？ 出待ちしてたから。

「えーと、合計すると……平均点が88・4点で……普通にトップじゃな」

「なんか、エリートクラス並みの点数になってる……」

啞然としている俺と、飄々としている学園長。

そんな俺たちを尻目に、ネギ少年の胴上げが行われようとしていた。

トラブルやらテストやら（後書き）

1年かけて基礎を築いて、直前に追い込みをかければこんなものよ！

千雨って、別に認識阻害効かない訳でもないよね。

あれって、二次設定だよね？

麻帆良の気風に染まりきれない常識人っただけだよね？

単位エ……

卒業できるんでしょうか、俺……

吸血鬼騒動（前書き）

読み返して思いました。
なにこの急展開……

吸血鬼騒動

「三年！ A組！」

『ネギ先生ー！』

「それと、斉藤先生も忘れんな」

「ふっ、味方は近衛だけか……」

若干やさぐれた目を向けると、ほとんどの生徒は目を逸らした。裏切り者め。

「改めまして。3年A組担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです」

ああ、心なしかネギ少年も成長したようで何よりだ。

……俺のストレス、減るといいなあ。

「これから来年の三月までの一年間、一緒に頑張りましょう！」

「はい！」

「頑張りますわ！」

そういや、今日は身体測定があるって話だよな……
この様子だと、ネギ少年は忘れてるんだろうな。

「ネギ先生。今日は身体測定の予定がありますから、早く準備をしないと」

「え！？ あ、はい。そうですね」

声をかけると同時に、ネギ少年が十センチほど飛び上がった。

……俺、怖がられるようなことしたっけ？

悩みながらクラスの外に出ると、俺の脇をやたらと慌てたネギ少年がすり抜けていった。

中が沸いているということは……また失言か？
授業はきちんとこなすのになー。一般常識が足りないのかなー。
酒よりも、胃薬を奢って欲しい、今日この頃。

「あ、斉藤先生。先月のお給料どうでした？」

「給料？ なんでもた」

ネギ少年から声をかけてきたと思えば、給料の話。
金に興味が無さそうなのに、びっくりだ。

「いえ、先々月のお給料と比べて、5割程多かったです。斉藤先生もお給料上がりました？」

……五割で。あのぬらりひょん、正式採用されたからといって、俺と同じ額の給料与えやがったのか？

確かに、食費や家賃は浮くとはいえ、これから欲しいものも出てくるだろうが……いくらなんでも。

「確かに上がりましたが、そこまで世のサラリーマンに喧嘩売るような上がり方じゃありません」

「や、やっぱり、おかしいですね。学園長先生にも言ったんですけど、『取っておきなさい』の一点張りで」

あのじじい。何のつもりなんだ？
全く読めん……

「先生ー！ 大変やー！ まき絵が、まき絵がー！」

『何！？ まき絵がどーしたの！？』

「お前ら八モるな。ついでに、男性教師が居るんだから、出てくんな」

ドアや窓を開けた音を聞きながら、俺は溜め息と共に呟いた。

「斉藤先生。今日、ご飯要らないので」

「当番はネギ先生だったはずですが」

「……あー」

佐々木の様子を見て、ネギ少年は夕飯が不要だと言い出した。

だが、残念ながら今日の夕飯の当番は、ネギ少年である。用事があるからといって、そう簡単に当番を放り出すことは許されない。

「え、えーと……明日の朝食を代わりに作るので……」

「却下。明日の夕食をお願いします。ネギ先生は朝弱いんですから、ほんと」

「は、はづいづい……」

ぐにやりぐにやりと体を揺らしながら、ネギ少年は保健室から出て行った。

……その態度は、肯定と受け取っていいのか？

『すまんが、斉藤君。今夜、桜通りのパトロールをしてもらいたいんじゃないか』

俺を電話一本で動かしたあのじじいに、内心呪詛を吐きながら桜通りを歩く。

夜桜というのもいいものだが、不審者が出るかもしれない場所で、酒を飲む訳にもいかない。

武器が木刀しかないというのも、いささか不安でもあるし。

「普通の不審者なら、これだけでも十分なんだろうけどなあ……」

明らかに怪しいネギ少年や、龍宮やエヴァンジェリンの放つ、平和ボケした日本の学生とは思えない殺気。

超常現象の類が、いつ起こっても不思議ではない。

ああ、日本刀くらい欲しかった。個人的には備前長船がいい。

「おやおや、斉藤先生じゃないか」

「んん？」

明らかに上から響いた声に、俺は首を傾げた。

視線を上げれば、街灯の上に黒衣を羽織った金髪の少女が。

月の逆光で多少見え辛いですが、太陽と比べれば、その外見を把握する障害にもならない。

「エヴァンジェリンじゃないか……いや、マクダウエルと呼ぶべきか？」

「ふふ、どちらでもいいさ。……ぼつやが狙いだったが、まあ貴様でもいい」

ばさり、とエヴァンジェリンがその黒衣を広げる。
そして、軽い跳躍で街灯から俺に向かって飛び掛ってきた。

「貴様の腕前、確認させてもらおう！」

「木刀しか持ってないんだがなあ……」

やれやれ、と俺は逆手に持っていた木刀を右手で握り直し、その勢いでエヴァンジェリンに向かって振るう。

対するエヴァンジェリンは、当たる寸前に黒衣を羽ばたくように動かし、空中で方向転換。

そして、そのまま俺と五メートルほど離れた場所に着地した。

「筋は良いが、それだけか……大した獲物ではないな」

「教師を獲物呼ばわりかよ」

「い、いっらー！」

俺の後ろから聞こえた声に、俺は振り向いた。
なんと、ネギ少年が杖に乗って空を飛んでくる。
それなんて古典ファンタジー。

「さ、斉藤先生になにするんですか！ ラス・テル・マ・スキル……」

魔法か？ 魔法なのか！？ 由緒正しい、良く分からん詠唱によって発動する魔法なのか！？

「魔法の射手・戒めの風矢！」

魔法だー！ 魔法出たー！
俺を避けるように飛んでいく魔法に感激している内に、エヴァンジェリンは何事か呟き、氷の盾を発生させた。
盾に弾かれ、飛び散る魔法が首筋を掠めていくのに、引きつった笑いを浮かべつつ、俺は口を開いた。

「どーすりゃ良いんだ？ これは」

「き、君はウチのクラスの……エヴァンジェリンさん！？」

「ネギ・スプリングフィールド……奴の息子だけあるな」

「なんや、今の音!？」

「ね、ネギに斉藤先生!？」

ちよつとした、カオスだった。

「ふふふ……」

そんな中、混乱に乗じてエヴァンジェリンが魔法によって生じた煙の中に消えた。

ネギ少年は……それどころじゃないらしい。目がぐるぐるぐるぐる回っている。

「さ、斉藤先生にバレちゃった……つい魔法を使う癖を、どうにかしないと……」

「ネギ君、なにいうてるん?」

「あああホラ! ネギ! あっちに行つたの犯人じゃないの!？」

神楽坂のフォローによって、ようやくネギ少年が我に返る。

杖を背中に担いで、足に風が纏わり……ってオイ。それも見せたら

いかんだろ。

しかし、止める暇も無くネギ少年は走りだす。

明らかにオリンピックピック選手並みの速さだが、もうツッコまない。

「神楽坂。追うか？」

「えと、斉藤先生も？」

「質問を質問で返すな。少なくとも、俺は追う気である」

走り出した俺を見て、神楽坂も近衛に一言残した後、走り出す。

先に走り始めたはずの俺を、神楽坂は悠々と追い越していく。

……一応、スキルとかで身体能力に補正入ってるはずんだけどなあ。

パツ、パツ、と光が空に舞うのを追いかける。

先程のネギ少年のセリフからすると、魔法は隠さないとイケないはずだが……

どう見ても、欠片も隠している様子は無い。

夜間に外出している人間のことは、考えていないのだろうか。

「あ、見えてきた！ 屋上に着地するみたい！」

「いやいや、お前視力どんだけだよ」

明らかに、1キロ以上先を、しかも夜間に。

常識外れの視力と言わざるを得ない。

「しかも、あつちは二人に増えたわ！ 新手!？」

「もうずっと戦闘実況してる」

ここから届くのかどうか分からないが……

やらないで後悔するより、やって後悔したほうが良いと、誰かも言っていた。

ここでやらないで、いつやると言うんだ！

「ラビオ
Rapio ポテスターズ
Potestas」

「え、何語？」

ビクッ、と俺に振り返った神楽坂は放置。

ようやく、俺にもその屋上の様子が見えてきた。

どうやらネギ少年が殴られて……屋上から落下するようだ。

ちよつと待てえええ!？ あれ意識失ってるぞ!？

人死に出すとか、何考えてるんだエヴァンジェリン!

「う、おりゃあああああ!」

ポッ！ と神楽坂の体が発光し、凄まじい加速でネギ少年の方に走

り出す。

眠った力が目覚めたのか！？ リアル中二病なのか！？

そのまま、ネギ少年をキャッチして……減速出来ずに壁にぶつかった。

おい、そこ寮だろ……？ 睡眠妨害しちゃいかんだろ。

「どういうことだ、茶々丸？」

「デコピンでは威力が足りず、呪文が妨害出来ませんでした。完成まで一秒も無く、手段を選んでいる場合ではない、と判断しました」

そこに、バサリバサリとエヴァンジェリンが降りてくる。

……力抜いが効いてたってことでOK？

「ふん。斉藤先生。ぼつやに伝えておけ。次の停電の時までに、パトナーを探しておくことだな、と」

その言葉を残し、エヴァンジェリンは再び飛び立っていく。

……結局、俺が魔法を知っただけで終わった？

展開が急過ぎて意味分かんねえ……

吸血鬼騒動（後書き）

R a p i o P o t e s t a s

奪う・力という意味のラテン語。

世界樹では詠唱の類は出てこないの、独自設定と言い張れば（r y

力被いの一言で済ませるのが、あまりにも味気なかったの。

10月16日改訂

どこのラテン語辞書を見たんでしょうか、過去の俺は……

パートナー？（前書き）

結界については、独自解釈。

めんどくさかったら、俺は投げるもん。

単純に仕事である可能性も無い訳ではないのだからけど。

パートナー？

『すまんが、昨日のパトロールについて報告書を出して貰いたい』

「パトロールの分が出るのは聞きましたが、報告書の分の給料出ますよね？」

『……………もちろんじゃ』

「なんですか、その間は」

朝っぱらから、俺は学園長によって増やされた仕事に忙殺されていた。

報告書って……………直接報告じゃいけねーのかよ。

「はぶ……………ほはようございます、さひとうせんせい……………」

「おはようございます、ネギ先生。朝ご飯出来てますよ」

「ふあい」

ガリガリガリガリとペンを走らせていると、ようやくネギ少年が起きてきた。

といつても、顔を洗って朝食を食べて学校に行けば、職員会議には

悠々間に会う。

俺の調きよ……躑のおかげである。

バシャバシャと水が跳ねる音が数秒続き、水が蛇口から流れ出る音だけが、数瞬流れた。

そして、その次の瞬間にはドタドタと足音が向かってくる。

「さ、斉藤先生！ ききききき昨日……！」

「まず落ち着け」

余りのネギ少年の慌てっぷりに、逆に動揺してしまい、素で答えてしまう。

それにネギ少年は気付いていなかったようで、深呼吸を繰り返している。

「えと、見てました……よね？」

「ああ、あの光る矢っぽいあれですか」

「あつ……そうですね」

それからは、ネギ少年の説明が始まった。
なんでもネギ少年は魔法使いらしい。

そして、人の為に魔法を使う立派な魔法使いを目指しているらしい。
反対に、エヴァンジェリンは悪い魔法使いを自称し、更に仲間まで

いるとのこと。

その説明を、俺は報告書を書きながら……というかどうかどうせ学園長も魔法使いなので、適当にだが。

ネギ少年が自分を魔法使いと言った瞬間から、報告書のクオリティは70%ダウンである。

「それで、昨日は暗がりでも良く見えなかったんですが、その仲間に詠唱を邪魔されて……」

「はあ……詠唱しないと魔法って使えないんですか？」

「いえ、無詠唱という技法もありますが、まだ僕は使えなくて……」

まあ、まだ10才だし、しょうがないだろう。

というか、まともに授業が出来ている時点で、ネギ少年は相当優秀である。

……できれば、常識を身につけてから教職に就いて欲しかったが。

「それで、斉藤先生には、魔法のことを黙っていて貰いたいんです。本当は、魔法で記憶を消す決まりなんですけど、先生はエヴァンジェリンさんに……」

あ、俺が狙われてると勘違いしてる？

本当の狙いはネギ少年だって明言してたけど……

まあ、記憶消されるのも困るし、黙っておこ……あれ？

「あ、思い出した。エヴァンジェリンから、ネギ先生に伝言です」

「え！ エヴァンジェリンさんから！？」

「確か……『停電までにパートナーを見つけるんだな』と」

「……！ そうか、あの仲間はエヴァンジェリンさんのパートナー
だったんだ……」

一人で盛り上がっていると声をかけるのは、なんだか気が引ける
が……

これは、言わざるを得ない事項である。

「ネギ先生。もう出ないと間に合いません」

「え、あ、ああああ！？ 朝ご飯食べてないのに！」

「この展開、既に予想していました」

「……え？」

一度は言ってみたいセリフを折角だからと使ってみたが、どうにも
リアクションが薄い。

まあ、しょうがないか。日本人にも通じないことあるし。

「既に、今日の朝食は弁当箱に詰めてあります。HRは代わりにやっておくので、食べて下さい」

「斉藤先生が……女神に見えます……」

いや、“女”付けんな。

「せんせー。今日、ネギ先生は？」

「遅い朝ご飯をとってる」

「ああ、私に言って下されば、そのぐらい用意しますのに……」

「いいんちよ、恍惚としてないで号令してよ……」

纏める立場の委員長が仕事をしないという、いつもの事態をさらっと流してHRは終わった。

ネギ少年が来るまではまともだったのに……雪広エ……

気持ちを切り替え、書類を片付ける為に職員室に向かおうとしたところで、バタバタと忙しない足音が聞こえた。

当然、廊下を走るのは禁止である。

一言ぐらい注意するか、とドアに手をかけると、足音は消え、ドアが勝手に開いた。

ドアを開いたのは、ネギ少年。つまり、走っていたのはネギ少年で……

「ネギ先生。廊下を走るのは……」

「斉藤先生！ 僕のパートナーになって下さい！」

ミシ、と空気が軋む音がした気がした。
ザ・ワールド！ 俺の時は止まる！

「ね、ネギくん！？ なんで男色！？」

「へ？ 男色ってなに……」

「次のネタ降臨キターーーーーー！」

「きゅ、きゅっ……」

「の、のどかが倒れたですー！」

「ああ、ネギ先生……」

「いいんちよも倒れちゃったよー！」

そして、時は動き出……何このカオス。
パートナーという……ああ、魔法使いのパートナーか。

そして、こいつらは性のパートナーだと勝手に勘違いしている、と……どうすんだよ、コレ。

「……授業。頑張ってください」

「え……あ、はい」

ネギ少年の返事は、聞こえなかった。

というか、胃が勝手にキリキリキリキリ痛みだし、それどころではなくなつた。

幽鬼のような足取りで、俺は教室を退室するのであった。

「ハア……腐ってやがる……早すぎたんだ……」

「……何がだ？」

ふらりとやってきた、うちのクラスの副担任。

私がサボっているのを咎めに来たのかと思えば、体育座りで溜め息を吐いている。

……何をしに来たんだ？

「ハア……書類……見たくもない……」

……何だこれは？
私にどうしろと？

そんな中、私はふとある感覚を感じた。

私にかけられた呪いと連動する学園結界を、何者かが抜けた気配。

「面倒だが、調べるか」

ナギが『そういえば麻帆良のじじいが警備員を欲しがっていた』な
どと思いついたせいで、付け加えられた機能。

学園都市の治安を乱すものを、放っておけないのだ。
魔力に任せて適当にイメージだけを叩き込んだ結果、その機能は正
しく作用している。

「死んだ人間を思い返すのも、馬鹿馬鹿しいがな……」

吐き捨てるように独り言を零しつつ、私は茶々丸の元に急いだ。

体育座りで、壊れたラジオのように独り言を呟き続ける副担任を残
して。

書類を全て高畑に放り投げ（出張の分の貸しだと言い張った）俺は
屋上でたそがれていた。

あー、そういえば魔法って科学の発展の為に貢献できないんだろ
か。

VRMMOとか、一刻も早く実現して欲しいんだが。

「こんなところに居たんですね。 斉藤先生」

「ん？ ネギ先生ですか」

バサリとはためく赤毛。

常に持っている木の杖とローブを見る限り、魔法使いっぽい服装で
はある。

……というか、誰もそんな疑問を発しなかったな。

「斉藤先生……一緒に、エヴァンジェリンさんと戦ってくれませんか？」

「エヴァンジェリン……あいつは、相当強いんでしょう？」

「はい。調べたところ、元六百万ドルの賞金首だそうです。現在は
失効していますが」

六百万……しかもドル……恐ろしいな、そいつは。

そんな大金がその首に付いているのに、未だ死んでいない事実が、
エヴァンジェリンの強さを示している。

「なるほど。ネギ先生だけでは、どう考えても分が悪い」

「その通りです。桜通りの時も、僕は圧倒しているつもりで、誘導されていました」

ネギ少年が圧倒？ それはおかしい。

その程度なら、とつくに討ち取られているはずだ。

ならば、何らかの制限をかけられた上で……いや、そもそも何でそんな賞金首が日本で学生やってるんだ？

「ネギ先生。順番に整理していきましょう。片付けるべき疑問が多すぎる」

まず俺は、指を一本立てる。

問題なのは、賞金の額だ。

並大抵のことをしても、そんな大金を懸けられることは無い。

「まず一つ。エヴァンジェリンの見た目に反して、賞金の額が大きすぎる」

「それは簡単です。エヴァンジェリンさんは、真祖の吸血鬼なんです。500年は生きていますか」

500年。言うのは簡単だが、その重みはそう軽くない。

精々100年の時間軸しか持たないただの人間では、そう簡単には

追いつけないほどに。

続いて、俺は二本目の指を立てる。

朝に聞いた話によると、ネギ少年は魔力は優れているものの、見習いだ。

その見習いに圧倒されるような賞金首が居ては、おかしい。

「二つ目。六百万ドルという大金の首でありながら、弱すぎる」

「それは僕も思いました。真祖の吸血鬼は、普通の魔法使いとは比べ物にはならないほどの魔力を持っているはずなんです。

でも、桜通りの時、エヴァンジェリンさんは触媒を用いなければ魔法を使えないほどに、魔力が少なかった」

触媒。化学で使うようなものと考えれば良いか？

魔法という反応を起こすのを、容易にするものか。

ネギ少年の発言から推測すると、普通の魔法使いなら、触媒は必要ない。

それを、膨大な魔力を持つはずの吸血鬼が必要とする理由……

「もしかすると、封印されているのかも。それなら、賞金が失効しているのも頷けます」

「封印、封印ね。それは、真祖の吸血鬼が中学生やってると、関係があるのかな？」

「そんな魔法を聞いたことがあるような……笑い話の中で、ですけど」

つまり、それが真実だとするなら……

エヴァンジェリンは、魔法使いの命脈である魔力を奪われた上、強制的に中学校に通わされている？

……ちよっと同情したくなるな。

「それじゃ三つ目。ネギ先生が狙われる理由は？」

「恐らく、エヴァンジェリンさんは僕の父さんのことを知っているんじゃないかと思うんです。

わざわざ、僕に父さんのことを教える、と言ってきたのは、その理由が父さんに関係するものだから」

「ネギ先生は、父親のことをどう思っているんです？」

「父さんは、英雄で、立派な魔法使いで、僕の尊敬する人です」

ネギ少年は、実に誇らしそくに言った。

“英雄”……か。中々重い言葉だ。

「それなら、その言葉を出せば、ネギ先生が乗ってくると見た可能性もありますね」

「た、確かに、そうですね。僕は、父さんの息子のはずなのに……」

知らないことが多すぎます」

そう言つて、ネギ少年は落ちていく夕日の方に、顔を向けた。その表情は憂いに溢れていて、少年好きなら一発でノックアウトされるだろう。

突然パートナー発言は頂けないが、そこそこ成長したようだな。あとは一般常識さえ覚えてくれれば、完璧なんだけど。ほんと。

「さて。この話はこのへんで終わりましょう。停電の日まで、まだ余裕もあります」

「あ、そうですね。今日の晩御飯は何ですか？」

「今日はいわしのつみれを入れた鍋にしようと思つてます」

「鍋つて美味しいですね。中身をちよつと変えれば、味も全然違ってきますし」

「ネギ先生も、日本の食というものが分かつてきましたね」

そんな感じで、俺とネギ少年は雑談しながら寮へと、足を動かした。高畑が書類を処理しきれずに、しずな先生に手伝ってもらっていたのは、また別の話だ。

パートナー？（後書き）

なにこのカオス。

ながしシスターみて、めだか書きたくなっただが、アイデアが無い。
というか、マイナスのしゃべりむずい。

そついえば、斉藤くんは魔法世界行くんでしょうか。

行かない気がします。

ぐだぐだエヴァンジェリンとだべっていても、良い気がつっすらしている。

生物がやってきた(前書き)

更新が遅れてすいません。

だって、課題がやばかったんだもの(・
・)

生物がやってきた

ちょうど、部屋に入ろうとした時。

俺とネギ少年を迎えたのは、誰なのかよく分からない声だった。

「景気悪そうな顔してるじゃんか、大将。助けがいるかい？」

どこからか、軽薄そうな声が響く。

ネギ少年が左に右に、視線を動かすが、声の主が見付かった様子はない。

「だ、誰？ どこから!？」

「下だよ、下」

その声に、視線を下に向ければそこには細長い生物。なまもの
おそらくイタチ科の生物ではないだろうか。

「俺っちだよ、ネギの兄貴。アルベール・カモミール!」

「あー! カモ君!」

「……何ですか？ このナマモノ」

思わず口から零れた疑問をさっくりスルーして、一人と一匹は話しを続けた。

「へへっ。恩を返しに来たぜ、兄貴」

「あはは。久しぶりだね」

……よし。放っておこう。

そう決めた俺は、声をかけることなくドアを開け、音を立てることなく閉めた。

ネギ少年が部屋に戻ってきたのは、それから10分後。
俺が鍋の具材をグツグツと煮込んでいる時だった。

「へえ。ネギ先生のお姉さんからねえ……」

「その通りッス。俺っちが来たからにはもう大丈夫ッスよ、兄貴！」

なんかうさんくさいイタチの話聞いて、俺は思った。

……パートナーって、アレかと。

「あ、パートナーで思い出しました。斉藤先生。パートナーの件、もう一度考えて欲しいんですけど」

「……やっぱり、教室でのアレは、そういう意味だったんですね」

はああああ、と深い溜め息を吐く。

魔法使い関係なら、教室で言うなよ、と。

「ネギ先生。教室でああいうことを言うと、結婚などのパートナーとして捉えられかねません」

「え？ でも、男同士だし……」

「同性でも、そういう感情を持つ人は居る、ということですよ」

いや、愛だの恋だの講釈するには、ネギ少年は幼すぎるか。
むしろ、小学校でバカやっててもおかしくない年齢だしなあ……
ていうか、好きな子の気を惹きたいが為に、いじめるような年だ。
愛はともかくとして、恋も、自覚するには早すぎる。

「兄貴。この人をパートナーにするのは、止めておいた方が良くいで
すぜ」

「え、どうして？」

「この人あ、大して兄貴のことを好きじゃない。……それと、仮契

約の方法が方法つすから」

生物の呟きが聞こえなかったようで、ネギ少年は首を傾げているが、俺には聞こえた。

男同士だと適さない方法……まさかな。

「一応聞くが、それは服を脱ぐ必要があるか？」

「え、いや、そんな必要は無いツス。ただキスするだけっすから」

「ええええ！ そんなの初耳だよカモくん！」

「……魔法学校で習わなかったんすか？」

生物と俺は、ネギ少年に呆れたと言わんばかりの視線を投げかける。俺と生物の視線に、ネギ少年はアワアワと弁解の為に口を開いた。

「だ、だって僕まだ10歳だし……」

「教師を勤める以上、年齢は理由になりませんよ」

「魔法使いと従者はセットだなんて、決まりきったことじゃないスか！」

「アルベール。それは魔法使いの間では常識なんだな？」

「もちろん。一番簡単な儀式がキスであることも、大抵の魔法使いが従者を持つことも常識っス」

再び、今度はジト目でネギ少年を見る。

あうあうと唸りながら、ネギ少年は目を回し始めた。

やっぱり子供だな。うん。

「それでは、話を戻そう。仮契約の相手は、ネギ先生に好意を持っているなければならないのか？」

「そんなもんは大前提っスよ！ 互いに信じあい、労わり合えるような関係でなければ、契約を結ぶ意味が無いっス！」

まあ、戦闘のパートナーだしな。

土壇場で裏切るような人間をパートナーに選んでも、意味が無いどころかマイナスだ。

だからこそ、掛け替えのない絆で結ばれている人間を選ばなくてはならない。

「実はですね……兄貴のクラスの娘達……」

そういう生物の顔は、必死だ。

まるで、何かに追い立てられるかのように。

そして、生徒を『魔法』などというものにこの俺が、関わらせるとでも思ったか。

「お前にとっては残念だろうが、3-Aを巻き込むことは許さん」

「えー！？ な、なんでっすか？」

「俺は、30組の保護者から、30人の生徒を預かっている。あくまで“預かって”いるのだ。

分かるかアルベール。俺は生徒という原石を、磨いて返さねばならんのだ。

磨けば光るに違いない原石を、傷物にして返すなどということは俺が許さん！」

聞く限り、魔法使いというのはやくざな職業だ。

命を落とすことだって、そう珍しいことではないはず。

生徒がなんだか分かりませんが亡くなりました、では駄目なのだ！俺は可能な限り生徒を守り、可能な限り危険を除かねばならない。

……そして、何故でしょうか。ネギ少年が涙を流しています。

「……………どうしたんです、ネギ先生」

「僕も、僕も斉藤先生のような先生になれるでしょうか……………？」

「ネギ先生。君は賢い。だがまだまだ精神的に未熟だ。今はただ、学ぶことです」

「はい……………はいっ…！」

「……あのー、パートナーの話は……」

生物の呟きは黙殺する。ネギ少年は純粹に聞こえてないようだが、それにしても、今日は素晴らしい日だ。

ネギ少年が、素晴らしい教師を目指そうとしている。

これからは、迂闊な魔法使用は無くなる……と思いたい。

「兄貴、兄貴！ あの金髪と緑髪の二人から、契約の力を感ぜ！ ぜ！」

「ええつ、じゃあ茶々丸さんが ムギユ」

「ええい、昨日の今日でコレだ。一般人の前で喋るなアルベール」

教室に入る直前になって、急に生物が喋り出した。

生物を止めるのは間に合わなかったが、ネギ少年は変なワードを出す前に止めることに成功。

全く、隠す気無いだろこいつら。

だが、生物が喋ったことによる収穫はあった。

魔法に関係するものが粗方判明したのだから。

反応したのは、エヴァンジェリンと春日と龍宮か。

ちょっと微妙な反応だが、桜咲もそうかな？

神楽坂はまたかー、って顔してるな。……苦労しそうだ。

その他は、大体麻帆良標準の反応だな。絡繰とレイニーデイは表情が薄過ぎて良く分からんが。

「ねえねえ先生。今この子喋った？」

「腹話術だ。もう一度やってみせようか？」

エヴァンジェリンと春日はいやいや、という顔をしているが、他の奴らは大体納得したな。

あ、長谷川も微妙に納得してない顔だ。

「さて、それでは今日もHR始めるぞー」

「おー！」

「お姉ちゃん、なんで張り切ってるんですか……」

「意外な特技やったなー」

数名、微妙に反応がズレていたが、俺は気にしないことにした。面倒だったし。

お、レベル上がってる。今度は何を取ろうかね。

さて、ようやく放課後になった。
よって、ゆっくりと生物に制裁を加えなければ。

「なあ、アルベール。魔法は秘匿するものってくらい、常識だよなあ？」

「そんなもん、当たり前っすよ！」

「じゃあ喋るなよ！」

びしっ！ と関西風に突っ込んだ俺に、生物は不思議そうに首を傾げるだけ。

……なんか、お互いの認識がズレている気がする。

「ちょっと待て、アルベール。まさかお前、動物が人間の言葉を喋るのは、デフォだと思ってないか？」

「え、喋れないんすか？」

これか！ 生物が自重しなかった理由！
こいつも微妙にズレてやがる！

「いいか、アルベール。お前がオコジヨ妖精の里に居ただとか、そんな裏設定は置いておけ」

「え、え？ いきなり何を」

「これだけ覚えておけ。普通の動物は喋らない！」

生物の顔が、まさに『なんだってー！？』状態になり、それから青くなる。

ようやく、自分のやったことを理解したようだな。

(や、やばかった！？ 下着ドロ関係無く、魔法の秘匿違反でとっ捕まるところだった！？)

「お前が不用意に喋れば、ネギ先生に迷惑がかかる。くれぐれも気をつける」

「わ、分かりやしたー！」

びしい！ と敬礼する生物。

うーん。これぐらいなら、芸を仕込んでいた、で通るか。喋らなければ意外にボロは出ないかも知れんな。

「分かったならよし。それで、問題はエヴァンジェリンだ」

「そいつが兄貴の敵なんスね？ 舎弟の俺っちがぶっちめてきますぜ！」

なにやらミニチュアな釘バットを手に走り出した生物の背中に、俺は一言呟いた。

「吸血鬼相手に威勢が良いな」

「いやいや無理無理吸血鬼なんて無理っスよお！」

釘バットを放り出し、顔を青くした生物は即座にUターンした。真祖だの何だのというのは言わなかったが、言っていたらこいつは逃げ出そうとしただろう。ただの吸血鬼でこの反応なのだから。

「その吸血鬼に従者が付いているというのだから、パートナーが欲しいのは分からんでもない」

「そうっスよね！ 早速……」

「だが、それとこれとは話が違ふ。生徒を巻き込むようなことは許さない」

「じゃ、じゃあどうやって吸血鬼なんかには勝って言うんですかい！？ 絶望的ですね！」

「そうだ。それだよ生物。」

犠牲を払ってでも勝つという考え方が駄目なんだ。

「いいか、アルベール。エヴァンジェリンは魔力を制限されている。そして、停電の日に日時を指定している。

ここから導き出されるのは、電気の供給によって魔力を制限するよ
うなものがある、ということだ。

「ということは、だ。電気が供給されるまで、負けなければ良い」

「で、でも勝たなきゃ兄貴は！」

「勝たなければいけないなどと、不可能なことを考えるな。現実には勝てない戦いの方が多いのだからな」

勝てない戦いと、勝ってはいけない戦い。

戦いの当人達が自覚していないだけで、これらは非常に多い。

「で、でも兄貴だけじゃ、吸血鬼と従者を相手に耐え忍ぶのは……」

「その為に俺が居る」

断言した俺を見る生物の目は、まさに目から鱗と言わんばかりだった。

生物がやってきた（後書き）

絶対、カモは秘匿のひの字すら頭がない。

ネギくんは想像以上の成長を遂げたようです（前書き）

気付いたらフェイントとか使ってたよ！

立派な魔法使い連中って、真正面からの勝負しかしないイメージがあるけど、どうなのかな。

ネギくんは想像以上の成長を遂げたようです

漆黒に染まった空を、金色が駆け抜ける。

その金色が内に秘めるは闇。

そして、圧倒的な死の気配　　！

「あはははっ！　ぼーや、まさか一人で私に勝とうとでも？　どうせ、この先で斉藤先生が待っているんだろっ？」

「……くっ」

金色を先導するように空を飛ぶ赤毛の少年。
彼は非常に焦っていた。

（まずい。完全に遊ばれてる。本気を出したら、途端に追い付かれる！）

「ほら、魔法の射手氷の19矢！」

「ぐっ、デフレクシオー風盾！」

金色の闇が放つ光を、少年は手に持つ銃から光を打ち出し迎撃する。それでもやはり、撃ち漏らしは出てしまう。

だが、撃ち漏らした光も、少年の周囲に展開された不可視の防壁に防がれる。

「ほう……二、三矢程度の魔法の射手では、突破出来ないか……」

冷静に分析を始める金色と違い、少年は一目散にある場所を目指す。この地、麻帆良と外との境界。麻帆良大橋。

その中心に、たった一人だけ男が佇んでいる。

その男の名は

俺は、麻帆良大橋の中心で、ネギ少年とエヴァンジェリンを待っていた。

腰には、鞘に収まった刀が一本。

生物に頼むのは癪だったが、中々良いものを探し出してくれた。

「……来たようだな」

精神を落ち着けながら、前方上空を睨みつける。

赤毛の少年と、金髪の少女が、空を飛んでいた。

ネギ少年とエヴァンジェリンだ。

深く息を吸い込み、そして吐き出す。

それだけの動作をしている間に、二人は橋へと降り立った。

「ふん。やはりか」

既に知っていたかのような顔で、エヴァンジェリンが言う。
横に、静かなる機械人形の従者を連れて。

「知っていようと、知っていまいと、俺がやることは変わらない。
ネギ先生」

「はいっ！」

詠唱を شدしたネギ少年を見て、エヴァンジェリンも詠唱を始める。
その速度は段違いであり、数瞬遅れていたはずの詠唱は、あっという間に同時になった。

主の詠唱を聞いていなかったかのように、絡繰が一直線に突っ込んでくる。

絡繰は見るからにロボットだが、その修復がどこまで出来るかなどは、不明。
となれば、傷つけるのは避けるか。

「ここは通す訳には行かないぞ？ 絡繰」

「承知しております。斉藤先生」

言葉は不要とばかり、絡繰が突っ込んでくるのに合わせて、俺も絡繰に向かって疾走する。

峰で絡繰の拳を逸らすのと同時に、上空で光が弾けた。

「エヴァンジェリンさんが、どういう生涯を送ってきたのかは知りません。

だけど、今の僕は魔法使いである前に、教師だから、あなたを止める義務がある！」

「義務で戦う人間が、私に勝てるのも思っているのか！」

二人の呪文が交錯する。

一方が放つ光は、輝き照らす光。

もう一方が放つ光は、暗く落ち行く光。

対照的な二つの光が弾けて混ざる。

「僕は確かに、義務で戦っています。でも、決して『義務感』から戦っている訳じゃない！」

僕がそう『しなければならぬ』と、自身で自身に課した義務だからこそ、僕はここに居る！」

「もはや、問答は不要か……ならば、自らが正しいことを、力で示すが良い！」

二人の手に、光が集う。
それを見たオコジヨは悟る。
ここでこの勝負は終わるだろうと。

「来るがいい！」

ヨウチスネスダラ座ンス
「雷の暴風！」
ニウチスネスダラ座ンス
「闇の吹雪！」

二人の魔法がぶつかり合う。
当然の如く、魔法の年季は少女が上。
故に、少女の魔法が少年の魔法を上回るのは必然だ。
だが、それに納得しきれていないのは、当の少女。

（おかしい。あまりにも手応えが無い。力を見誤ったか……？）

その瞬間、少女の魔法の出力がガクン、と落ちて、少年の魔法と拮抗した。
拮抗したことは問題無い。それだけ少女が優れていたということだ。
だが、何故出力が落ちたのか？

「……まさか」

魔法の打ち合いの最中に視線を逸らすなど、愚の骨頂。
それでも少女は、つい下に視線をやってしまっていた。

少女の従者と戦っている男が、刀を持っていない方の手を少女に向けている。

(くそっ！ 剣士だと思っていたが、術も使えたかつ！？)

焦燥に歪む少女の顔に、影が差す。

ゾクリと背筋に走った悪寒に従い、少女は顔を上げた。

少年が、詠唱を終えて、少女に右手を向けていた。

「魔法の射手光の29矢！」

少女に、魔法が殺到した。

少女も常時展開の防壁で防ぐが、それで防ぎきれぬ量では無かった。
負けたというのに、穏やかな顔で、少女は橋へと落ちていく。

「油断が、あつたか」

「イエス、マスター。多量の魔力による、高揚感も作用してのこと
だと推測出来ます」

非常に穏やかな顔で、少女は大の字に倒れていた。後を追って、少年が橋に降り立つ。

「ククク……あの程度のことには気付かなかった私の負けか。これでは認めざるを得ん」

「では、悪事はこれっきりにして、授業にも出席してくださいね」

「既に四回繰り返した内容を、もう一度か。あくびが出そうだよ」

「だが、それでも授業には出てもらわんとな」

立ち上がった少女の脇に従者が寄り添い、その後ろから男が声をかける。

少女は、少々冷やかな目で男の方を見た。

「茶々丸相手に峰だけで凌ぐとは……桜通りでは、手を抜いていたか」

「木刀は刀じゃなくて、剣のカテゴリーなんだぜ」

少女の静かな問いに、男は飄々とおどけて見せる。

とはいっても、彼は真面目に答えているのだが、周りからはそう見えない。

「剣の熟練度は上げてません、とでも言いたいのか。現実とゲームをどっちかにするな」

「吸血鬼にそれ言われるなんて、レアなんだろうな」

聞いているようで聞いていないような男の発言に、少女のコメカミに青筋が走る。

「虚構の存在だとしても言いたいのか？ その顔に一発拳を叩き込んでやってもいいぞ？」

「教師に対する暴力で、反省文を書かせてやってもいいぞ？」

「ぐ、ぐううう……権力を濫用しおって……」

怒りに震える少女の手に、魔力が集まる。

だが、あくまでおふざけだと認識した故か、男がそれに反応する様子は無い。

「……マスター。予定通りに停電が復旧します」

「む。そうか。……勝てなかったのは残念だが、しょうがあるまい」

雷が落ちるような衝撃が、少女を襲う。

それと共に、少女を包んでいた全能感も消える。

従者が苦しそうな少女を抱え、ぺこりと頭を下げて、どこかへ飛び立っていく。

もう日付が変わるような時間。そのまま、自宅へ帰るのだろう。

「それでは、私達も帰りましょう。ネギ先生」

「はい。ありがとうございます、斉藤先生」

互いに声をかけ合い、教師二人は帰路に着く。
明日も授業がある為、割りと急ぎながら。

「皆さん！ 来週は修学旅行です。準備は済みましたかー!？」

『はい!』

……おい、綾瀬と長谷川。

後ろで控えてる俺には、全部聞こえてるぞ。

クラスメイトをアホだの、小学生だの。

まあ、言いたくなるのは分かんでもないが。

「うちのクラスは留学生も多く、ネギ先生も日本は始めて……日本文化を学ぶ意味でも、クラスの総意で京都・奈良に決定いたしました」

「京都といえば八つ橋ですよね！ あれ、お姉ちゃんに送ってあげようと思っんです！」

「ネギくん。イギリスに着くまでに腐っちゃつかもよ？」

「え！？」

八つ橋といえば、生八つ橋。

でも、焼きも普通にうまいぞ？ せんべいみたいで。

クラスがネギ少年も含めて騒がしい中、教室の前のドアが開き、しずな先生が入ってきた。

「ネギ先生。学園長がお呼びですよ」

「あ、はい」

……麻帆良の中では、これで通るのか！。

職場の先輩だぞ？ しずな先生も気にしてないみたいだけど。

バタバタと喜色を隠せないままに、ネギ少年が教室を出て行く。

おい、雪広。残念そうな表情を、少しは隠せ。

「さて。修学旅行中の自由時間についての注意だ。先生を一つの班に拘束しないこと」

「ええっ！？　そ、それでは私のネギ先生と二人っきりの時間は！？」

「ああ。取ってもいいぞ。十分くらい」

そう言うと、雪広はがっくりと頂垂れて、一瞬間を置いた後に体を起こした。

その目に、熱き炎を灯して。

「いえ！　逆です。逆に考えるのです。十分もあると考えれば良いのです。十分もあれば、私の」

「全員持つてるとは思いますが、携帯電話持つてる奴は、通報する準備しとけよー」

「はいー！」

「くぎみー反応早すぎー」

「なにになに？　斉藤に気があんの？」

「んなわけあるかー！　あとくぎみー言うなー！」

相も変わらず騒がしい。

そして、こんな雰囲気も良いなと感じ始めている俺が、確かに居る。

……レベル上げに支障出るかな。

「では、今日のHRはこれにて終了。日直、礼だ」

「きりーつ。礼」

「おやすみなさい」

おやすみなさい。修学旅行では、どんな騒ぎが待ってるんだよ。

ネギくんは想像以上の成長を遂げたようです（後書き）

これで文句言われたら、俺は匙を投げる。

京都イトコ一度はおいで（前書き）

……気のせいじゃないよな。
俺の文章って短いよな。

京都イトコ一度はおいで

「京都おー!」

「これが噂の飛び降りる……!」

「こら、他の観光客の邪魔だからポリウム落とせ馬鹿共」

「むぎゅ」

俺とネギ少年が引率する3-Aは、清水寺にやってきていた。他の観光客も割りとテンションが高いが、3-Aは別格だ。というより、こいつらが周りのテンションを引き上げている。

流石に、こいつら程元気は有り余っていないだろう。という訳で、出鼻を挫く形で、明石の頭を抑える。抗議の声も聞こえるが、それは先ほどよりも幾分小さい。これで、観光客への被害は抑えられただろう。

「本来は本尊の観音様に歌や踊りを楽しんでいただくための装置であり、国宝にしていされています。有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで……』の言葉通り、江戸時代には実際に234件もの飛び降り事件が記録されています。しかし、その生存率は85%と意外に高く……」

……まあ、迷惑にはなっていないから、良いや。
もう半分諦めて、俺は清水の舞台から3-Aの動向を見ていること
にした。

まず縁結びの神、地主神社か。
ん、物陰に隠れたな。

まあ、音羽の滝に姿が見えたら追いかければいいか。

と、そんなことを考えていた矢先、音羽の滝の上に、怪しい人が…
…人影？

なんというか、その、サルの着ぐるみが現れた。
そいつは、酒と書かれた桶から伸びたホースを縁結びの滝に垂らす
と、どこかへ跳んでいった。

……まあ、何はともあれ酒なら貰っておくか。
先回りしないとな。

旅館に戻り、部屋で酒を飲んでいると、ネギ少年とナマモノがやつ
てきた。

「あれ？ 斉藤先生、何を飲んで……お酒？」

「そんな桶、さっきまでは持ってやしなかったと思うんですけど…
…どうしたんですかい？」

「うむ。ちょっとな……」

くいつ、と酒を呷りつつ、俺はさっきの話を一人と一匹に話してやった。

最初は大人しく聞いていたナマモノは、最後まで聞くと人目も憚らず叫びだした。

「やっぱりあのせ……ムゲ」

「大声出すな、バカ。通報されたいのか」

「す、すいやせん」

「あの……斉藤先生」

何やら思いつめた表情で、ネギ少年は喋りだした。曰く、教え子を疑うのは、教師としてしたくない。だけど、怪しい行動を取っているのは事実。

「僕は、どうすれば良いんでしょうか……」

「聞けば良いじゃないですか」

「え？」

「ネギ先生が信用していて、事情を知っていきそうな人間……誰が居るんでしょうか」

「え、そんなの……タカミチか、学園長先生くらいしか……」

「では、学園長でしょうかね。高畑先生は忙しくて電話も取れないようですから」

というか、あのメガネ電源を入れてないんじゃないか？

『おかけになった電話は……』のアナウンス流れたぞ。

出張、って聞いたはずだが……

あのメガネが先に帰るっていつから、授業の準備頼もつと思っただがな。

ちなみに英語の。

携帯を操作するネギ少年とは逆方向。

廊下の方向から足音が聞こえてきたのは、その時だった。

腕時計を見れば、五時半。

確かにそろそろ時間だが……しずな先生っぽくはないな。

足音の軽さから察するに、足音の主の体格は、大きく見積もって160センチというところか。

「ネギ先生もこちらでしたか。お一人に話したいことがあります」

噂をすれば影が差す。

ちょうど今、ネギ少年と生物が言っていた、桜咲刹那だった。

「ふむ。要約すると、近衛が狙われている。ネギ先生の対応が微妙。俺に助けて欲しい、ってところか」

「ええと、その……そんなところです」

「あつうつ……」

志は立派だと、ついこの前思ったのだが、魔法関連は相変わらずらしい。

未熟であることに気付いたなら、修行なりなんなりするべきだと思うんだがなあ。

ネギ少年はまだ10歳ギリギリなんだし。

俺？ 大人になっちまったら、そういう努力は億劫になるんだよ……

「まあ、無手でもサポートくらいは出来るが……刀があった方が良いな」

「斉藤先生は刀を使うんですか？」

「ああ。技の数は少ないが、切り札くらいはある」

というか、ツバメ返しは酷いんだよな。

3回連続攻撃って説明だったけど……試しにやってみたら、ほぼ同時だった。

九 竜閃じゃないからなっ!? そもそも回数が圧倒的過ぎるからな、アレ!

「今は匕首しか持って居ないのですが、使えますか？」

そうやって桜咲が差し出してきたのは、広げた手ほどの長さがある短刀。

鍔が無く、鞘にしまうとぴったりと口が合うことから、合口とも書

く。
「短刀だし……いけるか？」

手に持って確認すると、どうやら刀スキルは発動しているらしい。割と判定が緩いようだ。

「どうやら、問題無いな。礼を言わせてもらっぞ、桜咲」

「いえ、構いません」

その時、コンコンとドアをノックする音がした。

桜咲の方を見れば、既に隠れるように壁に張り付いている。

ドアを開けると、そこに居たのはしずな先生。

時計に目をやると、針は六時を差していた。

「斉藤先生に、ネギ先生もここに居ましたか。教員は早めにお風呂

済ませて下さいね」

「了解しました。じゃ、行きましようか、ネギ先生」

「え、あ、はい」

わたたと準備を始めたネギ少年を眺めながら、俺は別のことを考えていた。

このナマモノって、縛り付けておいた方が良いかな？

「よっこいせつと」

女湯と書かれた暖簾の真下。

そこには、俺によつて『清掃中』と書かれた看板が置かれていた。

「斉藤先生？ なにしてるんですか？」

「ここは混浴だと聞いたので、対策をしておこうと思ひまして」

「こんよく？」

ネギ少年の首がかわいらしく傾げられた。

思わず周りを確認するが、雪広は居ないようだ。

「男性と女性が一緒に入浴する浴場のことです。……まさか、生徒が入ってくるとは思えませんが、念の為」

「へえ、日本人はシャイだと聞きましたけど、そうでもないんですね」

……いや。こういうところが例外なだけだから。
ヌーティストビーチとかと比べれば、そうでもないし。

「それじゃ、さっさと入ってしまいたいんですけど、生徒の入浴時間までそんなに時間ありません」

「あ、はい」

最近の疲れを洗い流したいなあ、と思いながらも、俺には洗い流してもまたすぐに溜まる気がしてならなかった。

「キタキタキタキター！ 男二人で温泉に浸かる教師！ 湯煙の中で一体何が！ くうー、この逆るイメージをそのまま紙につ！！」

その頃、旅館の一室では、Bでしな感じの山なし落ちなし意味なしな本を書こうとしている女生徒が居たのは、同室の者だけが知って

129.....

京都イトコ一度はおいで（後書き）

世界樹の分類的には、ヒ首は短剣かもしれないが……

まあ、問題あるまい。

刃が長いヒ首だってあるんだからな！

そつだ。京都に行こう（前書き）

もう来てるっちゅーねん。

毎度クオリティが下がっている気がして仕方ありません。
かといって……どこをどうすりゃクオリティ上がるんだか。

クトウルフネタで仮面ライダーブラック（暗黒神話的な意味で）
というのを考えてみたのだが……良く考えたらクトウルフ神話って
有名どころしか知らないじゃん！
特に火ってどうすりゃいいんだろっ……まともにも揃えられない
属性って……
ダーレスの馬鹿やろっ……

そつだ。京都に行こう

風呂からあがり、のんびりしていたところで、びっくりするような事実が判明した。

もう、生徒は就寝時間なのである。

どこのディアボロさんにキングクリムゾンされたのか分からないが、
— 先ず見回りに行かなくてはならない。

「ネギ先生。就寝時間のようですので、見回りに行ってきます」

「あ、僕も……」

「どうせ何回か行くことになるんですから、帰ってきたら交代することにしませんか？」

「あ、そうですね。じゃあ、僕は今のうちに休んでおきます」

部屋を出ると、新田先生が待っていた。
ネギ少年の同行を断った理由はこれだ。
三人で見回りは、ちょっと人数が多い。

「では、行きましょうか」

「そうしましょう。ところで、ネギ先生は？」

「部屋で休んでいます。帰ったら交代する約束ですので、ゆっくり行きましょう」

「そうですね。流石に、ネギ先生に3・Aを完全に抑えるというのも酷だ」

なんといっても、ネギ少年はまだ10歳である。

そんな子供が、授業をしているのだ。

生徒を完全に纏める、などというのはいくらなんでも酷な話だろう。そもそも正規の教員でさえ、生徒を御し切れないことがあるのだ。

新田先生と一緒に、階段を登っていく。

途中見かけた生徒達に、部屋に戻るように指示しながら、足を進める。

生徒達の部屋の前まで辿り着いたところで、数名の生徒が部屋の外に居るのを見つけた。

「こら、お前たち。就寝時間は過ぎているぞ。部屋に戻りなさい」

「あいあい。分かったでござるよ」

「げ、新田……あー、はい。分かりました。戻ります」

部屋の中に生徒が戻っていくのを見届けて、俺と新田先生は一階へと向かった。

一応だが、生徒が残っている可能性がある、と新田先生が見回りの必要性を述べたからだ。

まあ、そんなことないだろう。始めはそう思っていました。

ロビーから外に繋がる自動ドアの前。

脚立の上に乗って、お札をペタペタ貼っている桜咲が居た。

……新田先生に見つかる前に、どうにか……できそうにないな。

「こら桜咲！ なにをやつとる！」

「あー……」

ビクン、と体を震わせた桜咲を見て、ちょっと申し訳ない気持ちになる。

恐らく桜咲は敵に対抗ないし、妨害する為の術でもやるうとしていたのだろう。

しかし、オカルトなんて知らない新田先生からすれば、なんか怪しいもんを玄関に貼っているようにしか見えない訳で……

「あ、いえ、これはその……ふ、風水の」

建物を建てる時は、風水もそれなりに参考にするから、悪いことは無いはずである。

悪かったら、風水気にする客来ないじゃん。

「風水でもなんでもいい。怪しげなものを玄関に張るんじゃない！」

「は、はいいい……」

「あ、新田先生。これは俺が剥がしておきますから、桜咲を部屋まで」

「む、分かりました。それでは斉藤先生。後は頼みます」

新田先生と桜咲が上に向かうのを見ながら、剥がそうとするポーズだけは取っておく。

完全に姿が見えなくなったところで、俺は脚立から降りた。

恐らくこの札は剥がしてしまうと効力を無くすだろう。

ならばこのままにしておかなければ。

……しかし、結構この札目立つが、何も知らない人が剥がしたらどうするんだ？

新田先生も特に問題無く、この札に気付いていたみたいだし。

その頃、玄関前では一人の女性が立ち往生していた。

艶のある黒髪を腰まで伸ばしており、まさに日本の女性という感じである。

が、彼女は凄く困っていた。むしろ果てしなくと言い換えても良い。

「式神返しの結界か……札の状態でも入れんとは」

この発言で分かるだろうが、彼女はいわゆる呪符使いだ。そして、彼女が一番得意なのは式神を操る術である。

その彼女の目の前にあるのは、どんな状態だろうが式神を通さない結界。

通るには、全ての式神を置いていかなければならない。

「式神無しで西洋魔法使いに勝てるかいうたら……無理やんなあ」

結局、彼女は撤退した。

不利な状況であえて戦いに行く必要は無い、と判断したのだろう。

その日、旅館は平和だった。

「諸君。俺は君たちの行動力は認めている。

教師の引率など無くても、しっかりとした計画を立て、遊びまわってこれるだろう。

だからこそ、もう一度聞いて欲しい。これだけ守れば、犯罪以外何をしても構わん。

教師、特にネギ先生を長時間拘束しないこと！」

「ええー」

「あっ……」

「元気出すです、のどか。抜け道はあります」

「夕映さん！ その抜け道について詳しく！」

「はい黙ろっねーいいんちよ」

一部が爆発したが、綺麗に朝倉が抑えてくれたようだ。ちらりとこちらを見た朝倉に、右手の親指を立てて見せると、向こうも親指を立てた。今度何かあったら、奢ってやっても良いかもしれん。

さて、と箸を取ったところで、隣からポスンと空気が抜けたような音がした。

恐らくまだ誰も座っていないなかった座布団の中に、空気が残っていたのだろう。

誰が来たのかと右に目をやれば、そこに居たのは綾瀬だった。

「先生。少しよろしいですか」

「食いながら良いならな」

「ありがとうございます。先ほどの話なのですが、『教師を拘束』しなければいいのですね？」

む、気付かれたか。頭の回転は良いんだよな、コイツ。

勉強しなかったからか、成績は悪かったみたいだが。

「ご飯を口に運びながら首肯してみせる。」

綾瀬は安堵の息を吐きながら、口を開いた。

「なら、ネギ先生に『付いて行く』のは構いませんよね？」

「ああ。それなら構わん」

ここが落としどころだろう。

どうしてもネギ少年と周りたがるのなら、それを完全に禁止にするのは無理だ。

だからこそ、『付いて行く』形で一緒に回るといって逃げ道がある。

……ただ、ネギ少年は押しが弱いからな。

気付けば生徒の言う通りに回っていたとか、ありそうだ。

「ふふふ。言質は取ったのですよ、のどか。あなたの恋はきつと成就させてみせるです！」

「……あー、応援は出来ないが、妨害はしない」

「ありがとうございます！」

……こいつも、3・Aの一員なんだなあ、と実感した。
朝っぱらからテンションたけー。

「なぬっ！？ 教師と教え子が淫行疑惑！？」

その声が聞こえたのは、本当に偶然だった。

生徒が全員帰ってきたのを確認し、肩の荷が下りたような気分で、俺は酒を飲んでいた。

そこに新田先生がやってきて、職務中にアルコールとは云々と、さんざん怒られて廊下に逃げ出した。

そこで、まるでパイナップル頭……じゃない、朝倉の声を聞いたのだ。

声がる廊下は少し先を曲がったところ……という訳で、俺は廊下の曲がり角に張り付いて、盗み聞きを始めた。

その際、酔っているせいで頭を壁にぶつけてしまったが、ささいなことだ。

「えーと、つまりネギ先生が誰かに告白された……って、全然淫行じゃないっつものー！」

「十分に許されざる行為ですわ！」

ふーん。ネギ少年がねえ。

「自分で考えて下さい」

「あつ……」

突き放したような俺の言葉に、ショックを受けた様子のネギ少年。だが、俺の考えはちょっと違う。字面そのままの意味だけではないのだ。

「ネギ先生。人から聞いた答えで、その子は満足しますか？」

その子は、『あなた』の答えを聞いたがっているんじゃないですか？

「あ……」

「悩んで、悩んで、悩みつくして、それで出た答えこそが、その子に言つべき言葉だと思います」

「……ありがとうございます。斉藤先生」

そう言ったネギ少年の顔は、いかにも覇気に溢れ、先ほどとは大違っていた。

これで、朝倉が来てもさっきの状態のままよりは、マシだろう。

……あ、ふらふらしてきた。まだ酔ってるのかな。
京都の地酒買いに行こう……

そうだ。京都に行こう（後書き）

あれだよ。

原作ではきつと、ネギが出て行ったのと同時に入ったから入れたんだよ！

この後、斉藤君がアクロバットな感じでネコを助け出す展開も考えたけど、どう考えてもキャラが違っているので、ボツ。

犬耳の少年と眠りの呪文（前書き）

畏れよ、我をがチート臭い気がしたが、まあいいや。
使用制限なんてかける必要はあるまい。

どうせ、ラカンやナギ辺りには効かないし。

犬耳の少年と眠りの呪文

その夜、旅館に悲鳴が響いた。

夜空を裂くように響き渡った悲鳴は、当然見回りの最中の先生達の耳にも届いた。

当然の如く、先生達は悲鳴の元へと走る。

だが、彼らを待っていたのは非情というよりは、非常な現実だった。

「ね、ネギ先生が、五にん……」

そこに居たのは、新田先生の言いつけを破った佐々木まき絵と明石裕奈。

しかし、そんなことは問題ではない。

一番の問題は、駆けつけてきた新田先生をどう誤魔化すかだ。

この件について、瀬流彦はそう認識していた。

ネギ先生が五人。

正確にはぬぎ・ステルングフィールドとか、みぎ・ミテルングフィールドだとかが居た。

この常識から外れた光景……きっと、ネギ先生がその才能に任せて東洋の術式使ったんだろうなあ、と瀬流彦は思考する。

そして、その使い方をちゃんと教えなかった人間のせいでもあるんだろうなあ、と。

とりあえず、一般人である生徒は気絶している。

まだ新田先生は階段を上っている。
というわけで、迅速にこの魔法的現象を無に帰す為に、瀬流彦は詠
唱を省いた。

「魔法の射手連弾・光の四矢」
サギタ マギカセリウス ルーキス

光の矢が目標を違うことなく四人の分身を貫き、消滅させる。
後に残るのは、字を間違つて書かれた紙型のみ。

「……さて、どう説明しようかな、この状況」

ネギ先生は布団で寝ている。

部屋の入り口で気絶している佐々木まき絵。

そして、佐々木まき絵と頭でもぶつけたのか、目を回している明石
裕奈。

一般人である新田先生にどう説明するか。瀬流彦は頭を抱えた。

取りあえず、ロビーで正座ということになったらしい。
佐々木と明石が。

……先生の寝込み襲いにくる女子中学生って、どうなんだろう。

いや、変な意味じゃなくて。

「はあ……ネギ先生も才能に溢れてるのは良いんだけど……」

「大変でしたね」

「そーですよ、斉藤先生。大変だったんですよ。何で居なかったんですか」

「京都の地酒を買いに行っていました」

「……ちよつと分けて貰えませんか？」

「教員寮に送ったので、今は無理ですね」

なんだか疲れきった顔の瀬流彦と、俺は廊下を歩いていた。

新田先生のお達しである。3・Aならあと何人が出てきてもおかしくない、とのことだ。

……確かにそうだけど、もうちよつと信頼してあげましようよ。

修学旅行の夜なんだし、ちよつと羽目を外すくらい……ああ、あいつらだとちよつとじゃなくなるのか。

「……眠い」

「かといって、うちの生徒相手に一人で行動するのは迂闊でしょう」

「確かに、二人一組の行動を基本にする位しないと、不意を突かれ

「実際にまずいですよね」

まあ、別に倒されてやっても良いのだが、古菲とか長瀬相手だと一晩中廊下で気絶する羽目になるかもしれない。

それ故に、万が一の為、相方が倒されてもカバー出来る二人一組でのパトロールとなった。

というより、そんなことになりたくないから、二人で行こうぜ！
という自己保身の意味合いの方が強いのもかもしれない。

「新田先生の叱責が効いているみたいですね。今のところ、生徒が……」

そう言いかけた俺は、何かがあるように感じた方向。すなわち上に首を傾けた。

良く見れば、天井の色と同化するように布が張られている。

もちろん、従業員が布なんか張る訳が無い。決定だ。

「……居ましたね」

「……居ましたね。……ハア」

何だか疲れたような溜息を吐いた瀬流彦を見て、俺も思わず溜息を吐きたくなった。

上を見なければ気付かなかった程の隠蔽。明らかに犯人はヤス。

「長瀬。降りて来い」

「気付かれたでござるか」

はっはっはと軽い調子で笑いながら、長瀬は悠々と床に着地した。他の客に迷惑をかけないように、完全な消音まで成し遂げて、だ。……やっぱり忍者だろ。

「いやー、何か飲み物を買に行くだけのつもりだったでござるが、やはり日頃の習慣は」

「嘘だな」

「うんぬん!?」

分かりやすいくらいに、長瀬が固まった。

……カマかけただけなのに。

「どこの部屋に遊びに行くのか知らんが、正直に言えば通してやつても……」

「肝試しでござる。見回りの先生に見つからないようにネギ先生の部屋にいつて、髪を一本頂戴するのでござるよ」

「いいかもしれないと思ったが、俺の独断で強制送還だ。悪いな、

長瀬

「裏切られたでござる！ 正直に言ったのに、裏切られたでござる！」

喚く長瀬を連れ、二班の部屋へ向かい、部屋の中に長瀬を押し込んだ。

二班全員に、今度見つけたら見逃さないということを含め、俺と瀬流彦は見回りを再開した。再開すると同時に、二人揃って溜息を吐いたのは、おそらく言うまでもないことだと思う。

その後、俺はずっと見回り続け、朝日が昇るのを見届けた後、布団へと落ちた。

瀬流彦も同じような状況だ。なので、ネギ少年には下手に動かないように言い含めておいた。

……言い含めておいた、はずだった。

「斉藤先生！ ネギ先生が結界に閉じ込められたようです！」

……少年から、ガキに降格するべきか？

いやいや、そんなこと考えるよりも先に、助けに行くべきか。

一応、学園長からも一言頼まれてる訳だし。

「状況は？」

「桜咲さんから連絡があつて、その、ネギ先生が無間方処の呪法に捕らえられたと……」

「……綺麗に罫に嵌つたということですか」

ネギ少年には従者が居ない。

西洋魔術師としては、遮蔽物が無いのに銃撃戦をしなければいけないような状況だと、以前生物がいつていた。

……割とまずいんじゃない？

「場所は関西呪術協会に続く神社……？ 毘古社で良いんですよね？」

「は、はい。斉藤先生は、それをどこで？」

「学園長に聞きました」

それだけを瀬流彦に伝えて、俺は走り出した。
目指す場所は一つだ。

キキイ、と車が一台、俺の前に止まる。
それに迷うこと無く乗り込むと、俺は口を開いた。

「？毘古社までお願いします。運転手さん」

まるでどこまでも続くかのように見える鳥居。
しかして、この世に無限は無い。
あるように見えても、それは幻像か、神の住処か。

「まあ、今回は幻像まやかしだな」

どこまでも、どこまでも続く道。
既に、後ろに見えていた道路は見えない。
100メートルも離れていないのに、だ。

「魔法つて奴は厄介だねえ」

ぼやきながらも道を進む。
100メートル程進むと、あの夜も聞こえた魔法の音が耳に届いた。
腰を落とし、走り始める。
レベルが上がった恩恵を実感しながら走っていくと、十秒もしない
内に、それが目に入った。

辺りを見回している犬耳を付けた少年の背後に、ネギ少年が回りこ

んでいる。

「うわあああああああー！」

「っと、後ろかいな」

魔力を身に纏った拳で攻撃するも、少年は軽々と受け止めてしまった。

悔しそうな表情と、挑発的な笑顔が両者に浮かぶ。

「不意打ちすんなら、声は出さんほづがええで？」

「うるさいっ！」

むきになったような様子で拳を振るうネギ少年の拳は、当然のように回避される。

そして、あの少年相手だと魔法を使っている暇はどつやら無い……と。

勝てねーじゃん。

「助太刀しますよ、ネギ先生」

そう俺が声をかけると、両者共にひどく驚いた様子を見せた。具体的には、困惑の表情と苦渋に満ちた表情といったところだ。

「さ、斉藤先生？ どうしてここに」

「まさか、わいが全く気付けん程の使い手か……」

おおー、警戒バリッバリだ。

こついう時は……覚えてたあれを使ってみるか。

右手を無造作に少年に向けると、少年はファイティングポーズを取った。

……無駄だけどねー。

「ドルミア
D o r m i a」

「な、じゅっ……し」

パタリと、少年が倒れるのを見届けて、俺はヒ首に添えていた左手を離れた。

試したこと無かったし、効くかどうか微妙だったんだよな。効いてよかった。

さて、とネギ少年の方を向いてみれば、そこには誰も立っていないかった。

ネギ少年が、倒れていた。 what? why?

はて、と周囲を見渡し、生物が寝ているのを見て、よつやく合点がいった。

対象指定が、出来てない。

犬耳の少年と眠りの呪文（後書き）

昏睡の呪言はある程度の相手なら高確率で眠らせることが出来る強力な技。

ただし、RPGのお約束としてボスには効かないことが多い 重要

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9954p/>

なんか、神隠しにあったみたいで.....

2011年11月1日07時09分発行